



まやちゃんとう光の
剣



吉高 雅美

光の勇者誕生：キャロット姫が大変にや

キャロットお姫様は、体にピッタリのベットに立ったまま寝ていた。そこまでリアルじゃない。

ポンポコリン、リン♪
変な音楽で目覚める。そして、いつものように、姿見の前に立つ。

「私は、なんて綺麗なんでしょう。起きて直ぐ、素敵なドレスも着ているし、今日はどんなりボンが……きゃあ！！大変！私のお尻がないじゃん？！」

姿見に映る、後ろ姿。キャロット姫のお尻がボコッと欠けていた。
「どうしましょう。こんな姿じゃ、恥ずかしくて、外も歩けない」
それで、パンプキン城は大騒ぎ、キャロット姫のお尻を探す。東の塔も、西の塔も探した。地下室だって、城の秘密の抜け道も、開かずの部屋も開けて探した。どこにもない。困ったマシュマロ王は、姫のお尻を見つけたものには、褒美をやる、と、国中に告げる気になった。告げるものにも、皆で探したんだから、もうバレバレ。

「キャロット姫や、お前のお尻は城に落ちていなかった。こうなったら、見つけた者に褒美をやるしか、ないであろう」

「ええっ。信じらんない。私のお尻のこと、みんなに言っちゃったの。
お嫁に行けない。そして、みんな言うのよ、あらお姫様、お尻をどこにお忘れ、なんて。悔しい！みんな死刑よ！ばかなパパも死刑！」

姫は強かった。
「なんと、わしが死刑になるのか」
「何言ってるのよ。だいたい、お尻を落とすわけじゃないじゃん。欠けたの。欠けてるだけなの」
「だから、欠けた、欠けらを探して……」
小娘が、お尻が欠けるなんて、いったいどんなプレイをしたんだか。
「違うってば、きっと、呪いよ。私の美貌を妬んだ誰かに呪いをかけられたのよ」
そっちな。

「美貌を妬むなら、顔をおかしくするんじゃないか？ どうしてお尻を？」
「いいから。早く悪しき魔導師を倒してよ」
でも、どう見ても、お尻は欠けてないのだが、王様は思った。
「ううむ。悪しき魔導師？ 倒し過ぎて、もうどこにもいないよ、きっと」
「居るの。絶対いる。どこかに居るからこうなったんでしょ。パパじゃ分からないの。大賢者に聞けば良いじゃん。大賢者なんて、こんな時に役に立たなきゃ、ただの毫碌ジジイでしょ」
最近会ってないいな、大賢者様。どうされていらっしゃるやら。

「おお、姫よ、我が娘よ、なんと賢い。では早速、大賢者を呼んでこれからどうしたら良いか、意見を聞いてみよう」

でも、どこが欠けている。見た目どこも変わって見えないのだが、いくら娘でも、スカートめくるのはちょっと、もう少し色っぽい女性ならゆくっり確認するのだが、王様は思った。
そして、大賢者がお城に呼ばれた。

王様は、皇子ではなかった。ただの羊飼いだっただ。それが、光の戦士に選ばれ（実はくじ引きで、はずれ、を引いて）、世界を恐怖に陥れていた、悪しき魔導師を倒し、この世界を平和にしたのだ。

それで、王様になった。それを見た人々に、光の戦士ブームが起きて、ねこも杓子も、光の戦士となった。魔導師を見つけると、誰かが言う。

「あっ。悪しき魔導師だ！」

そして、みんなで、ねちねち、小突いたり、つねったりする。

「ゆるして下さい。心を入れ替えます」

それで、世界には、光の戦士があふれ、悪しき魔導師はいなくなった。小突かれるのは、とっても恥ずかしいし、つねられるのは痛かったからだ。

大賢者も、もともとは、魔導師だったのだが、王様と一緒に悪しき魔導師を倒したことにより、大賢者となった。それで、魔導師狩りで、つねられることが、なかったのだ。

「大賢者と魔導師では、全然、字が違う」

それが、理由だった。

魔導師がいっぱい、まだいて、頼りにされていた時は、みんなに、尊敬されていた。しかし、それも、キャロット姫がまだ生まれる前の話。今や、ただの薄汚いジジイと成り果てていた。

よぼよぼと、賢者の杖を突きながら、王様の部屋に入ってくる。あまりの落ちぶれた様子に、それが、大賢者であると気づく者はいなかった。それよりも、こんな汚いやつを、どうして門番が、城へ通したのか、と、不思議に思った。

よぼよぼ歩き、でも、誰にも止められずに、王様の前まで着いて、立ち止まらずに、ピッ、と、王様にぶつかった。

「ようこそ、パンプキン城へ」

王様は自分の口から出た言葉にびっくりした。大賢者は、また、ピッ、と、ぶつかる。

「よくぞ、無事に戻った。なんじの経験値は○x、次のレベルまで、あと○xである。早く平和を取り戻すように」

私は頭がおかしくなったのか？ 王様は思った。大賢者が、また、ぶつかりそうになったので、王様は、慌てて避けた。

「さすがは、偉大なる王よ、良く私の試練を乗り越えた」

「ええっ。今のが試練」

「そうじゃ、王様が避けなければ、いつまでも、ピッ、と、ぶつかり、ぶつかる度に、あの面倒な聞き飽きた言葉を繰り返し聴かされる場所であったのじゃ」

「それって、お前が、ピッ、と、ぶつからなければ良いのでは？」

「それは……出来ない。誘惑、王様は何かくれるかも知れない、の誘惑には勝てないのじゃ。どうせ、もう同じことしか言わないと、思っってはみても、後一回、一回だけ、ひょっとしたらランダムなイベントが起こるかも知れない。せっかく、城まで戻ったのだから、体力を、ただで直し

て貰えるかもしれない、とな。そう思うのが人の情と云うものじゃ」

王様もやっと気がついた。

「あっ。大バカ者。あっ、違った。大賢者。ええと、さま」

確かに、大賢者様、と、素直に呼べないほど、ひどい格好をしていたのだ。

「随分な挨拶じゃの王よ。あの苦しかった冒険のことをもう忘れたか。

今でこそ王様でも、あの頃、光の戦士の頃、何回死んだのかな。

何回わしが、あの、こっちはずかしい棺桶を引きずって教会まで行ったか。よもや、忘れたとは言わせんぞ」

王様は慌てた。

「そんなつもりでは、ないのです。大賢者。あの時のご恩を決して忘れてはおりません。

大賢者様、その手は何です」

大賢者は手を出していた。

「言葉だけじゃね。出すもの出してもらわないと。金のない年寄りには、孫にも相手にされなくての。おぬし、王様じゃろ。たんまり、お金を貯めているって、噂じゃ。わしにも、もう少しくられても、良いんじゃない？ 年寄りに誠意を見せても、罰は当らんぞ」

この、くそジジイが、と、思ったが、しぶしぶ、財布から、数枚取り出そうとする。すると、大賢者は横から、さっと、その財布を奪う。

「おお、おお、良い財布じゃ。こんな財布が欲しかったんじゃ。わしに、この財布くれんかの」

「やる、やる、やるから、とっとと、城から出て行け。もう来なくて良いぞ」

「おやあ？ わしを呼んだのは、この財布をくれるためだったのか」

「あっ、まて、まてくださいませ。実は……」

と、事の次第を話した。

「うむ。それは、虫じゃな」

「ええっ！ 虫、私のお尻に虫なんか、いないよ！」

「おや、キャロット姫、どうして、ここへ、寝てなくて良いのか」

「だって、お尻が欠けてるだけで、あとは、なんともないんだもの」

「うむ。お尻が欠けてるだけでも十分に大変だと思うが……」

「痛くもなんともないの」

「うむ。風邪じゃな」

「風邪引いて、お尻が欠けるなら、世界中の人のお尻が欠けちゃうじゃん。あんた、ばかじゃない」

「そんなに長い言葉をしゃべると、入力が大変じゃぞ」

「何言ってるんの、このジジイ」

「まあ、待て、大賢者、もっと分かりやすく説明してくれ」

「つまり、虫が、虫だから、風邪に感染したのじゃ」

「わかんない」

「大賢者、その説明では、姫じゃなくても理解できないが」

大賢者は口の中でもぐもぐ言った。誰にも聞こえない。すると、キャロット姫は、ひらめいた

。

「ああっ。分かった！虫の呪いね！虫の呪いをかけられんだわ」

「いや、これは、呪いとは違うが」

「だって、テレビで見たも。陰陽師が干しカエルで、スープを作って、どっちがおいしいってやるの。それ飲んだら呪われるのよ。すごい。呪われると、カエルとびして、世界チャンピオンになるのよ」

「なに？ 姫はそんな物、飲んだのか。チャンピオンなのか」

「飲むわけないでしょ。でも、呪いな。あたしの美貌を妬んだ虫の呪いよ」

干した虫をツボに入れて、土の中に埋めてるんだきっと。

「どうすれば良い」

「うむ。これは、誰かの助けがいる」

「誰の？」

「光の戦士」

「光の戦士なんていっぱいいるよ。みんな光の戦士になっちゃったんだから」

「いや、他の世界の、光の戦士の助けがいるのじゃ。それ以外に、方法はない」

「じゃあ早く、他の世界から、光の戦士を呼んでよ」

大賢者は、なんか、違うのじゃないか、と思ったが……。

「うむ。つまり、他の世界の光の戦士を、に、へ」

「じれったい。さっさと、他の世界の虫退治の光の戦士を呼べば」

「そうか、他の世界の虫退治の光の戦士を呼ぶのだな」

「ちょっと、しっかりして。自分が言ったんでしょ」

大賢者は、なんか、違うのじゃないか、と思ったが……。

祭壇に向かった。

「なんたらかたら！！」

「そんな呪文で良いの？」

「しかたがないのじゃ、作者にセンスがないのだから。

”うちわ”は、あるが、”せんす”がない」

祭壇のまわりが、静かになる。メイドの女の子がショックで気絶した。倒れた拍子に頭をぶつけて死んでしまった。祭壇の上で。

「あたし、おやじギャグ初めて聞いた。こんな強烈だと思わなかったよ」

オヤジギャグだったのかー。オヤジギャグ、メイド殺人事件。

「おお、さすが我が娘。あれがギャグと良く見破った」

でも、お尻欠けてないんだけどな、王様は口の中でごによごによ言った。そうだ、大賢者はセンスのある呪文を思いついた。これなら、感激して感動するじゃろう。

「うんたらかたら！！」

「さっきと呪文違うじゃん」

スルー、完全スルー。感動してない。ならば、これでどうじゃ。

「ポン酢にしおから！！」

「うへえ。きもい」

祭壇の前には、チープな魔方陣があった。もくもく煙が起こる。

「きゃあ！ 魔方陣が壊れてる。火事よ、火事！

誰か、だれか早く水！」

メイドの女の子が水を汲みに行く。

「なんと、誰があんな安物の魔方陣を買ったんだ」

王様が叫ぶ。

「魔方陣なんて、一番安いので良いつて、王様が言ったはずじゃが」

大賢者はすまして言う。

「なんと、私が、言ったのか。でも火事になるなんて、知らなかったんだよ。

大賢者様、その手はなんです」

大賢者は手を出していた。

「文句言っても、魔方陣は立派にならんぞ。立派な魔方陣は高くての」

王様は、ふと思った。

「大賢者様。お金を払って、立派な魔方陣を買うのですか？」

「何を言ってるのだ、王様。お金を貰って、わしが、書くのじゃ」

このくそジジイめ。姫のお尻が直ったら、首絞めて殺してやる。でも、ちょっと思いなおした

。

「そういえば、前に魔方陣代払ったぞ。早く立派にしないと、別の者を、大賢者にするぞ。そしたら、お前は、ただの、毫碌魔導師になっちゃうぞ」

「それだけは、それだけは止めてくれ！ 魔導師になったら……つねられるのは、いやじゃ、小突かれるのは、いやじゃ」

メイドの女の子が、バケツを抱えて走ってきた。魔方陣に水をかけた。

バシャー！

の音がして、煙が消える。そこには、ずぶ濡れの、白猫。水に驚いて飛び上がった白猫が、祭壇に倒れて死んでる女の子にぶつかる、合体してしまった。メイド姿の女の子、ねこのひげが、手は肉球、猫の付け耳。他の世界から呼び出したのはただの猫？ それが、合体？

「にやお。にゃんちゃって」

にゃんちゃってって何だ。生き返った？ 合体？

「にゃんだ！ まやちゃん、水嫌いにゃ」

と、濡れた体を、毛繕いしはじめた。毛はないんだけど。

大賢者が、もったい付けて言った。

「ふむ。どうやら、他の世界の光の戦士が来てくれたらしい」

「ただのメイドちゃんでしょ」

「いや、光の戦士じゃ。きっと、キャロット姫を助けてくれる。

これ、そこのメイド猫、名前はなんと言う」

まやちゃんは、毛繕いしている。

「名前は、なんと言う」

と、一歩近づくと、まやちゃんは、くるりと後ろを向いて、無視するように、毛繕いを続ける。

「むむ。ねこちゃん。だめ？ はあい、ねこちゃん。だめ」

じれったくなった大賢者は、まやちゃんの背を指で、ちょんと突つつく。突つつかれても、まやちゃんは、毛繕いを止めない。ちょっとだけ、天井を見る。王様が、試しにと言った。

「かわいい、ねこちゃん。お名前は？」

まやちゃんは、振り向いた。

「まやちゃん、にゃ」

姿はほとんど女の子で意識は猫。

「さっそく、姫のお尻の虫を捕まえてくれ」

王様がまやちゃんに頼む。

「ちょっと、私のお尻に虫なんていないの！」

しかし、まやちゃんは、キャロット姫のお尻にジャレついていた。

「いくにゃ。ねこパンチ！」

バシ、バシ。バシ、バシ。

「ねこパンチしなくて良いの！」

「虫がいるにゃ」

「いないの」

「さすがは、他の世界の光の戦士じゃ。既に虫の存在に気づいたか」

大賢者は感心している。

「だから、いないって！」

「虫にねこパンチすると、ご褒美のシャケトバ貰えるにゃ。」

いくにゃ。ねこパンチ！」

バシ、バシ。バシ、バシ。

「いいかげんに、しなさい！」

まやちゃんは、バシンとなぐられ、ピューと飛んで、ドタリと壁にぶつかる。

「おお、光の戦士が飛んだ」

「まやちゃん、もう、飛ぶのいやにゃ。それに、飛べないにゃ」

「どうして」

「まやちゃん、箱入り娘にゃ」

「まさか、箱で飼われているから、箱入り娘ってことかしら」

キャロット姫は怒りに切れそうになっていた。その恐ろしさに、誰も話しが出来なくなった。

キャロット姫のお下げのリボンが、ふらふら、ゆれてる。まやちゃんは、とうとう、我慢出来なくなった。お下げのリボンにジャレ付いた。

「うるさい！」

ドシンとなぐられ、ビュンと飛んで、バシンと壁にぶつかった。

「うむ。どうやら、光の戦士より、姫の方が強いようだの」

と言った王様も、キャロット姫の強烈なボディーブローを食らった。

王様がお客をもてなす部屋。大きなテーブルがあり、椅子がいっぱいある。大きな鏡。大きな絵。大きな口ウソク。その大きな部屋に今は、四人しかいない。でも、テーブルの上に料理が、山のようにある。

「おいしいにゃ。これもおいしにゃ。おにゃ、なんか、変にゃにゃ」

「あっ。それ、たまねぎ入ってるよ」

ねこには、たまねぎが、体に毒なのだ。でも、見た目、ほとんど女の子。

「ふにゃ。大変にゃ。まやちゃん死んじゃうにゃ」

「大丈夫よ、食べ過ぎなければ」

既に、三人分食べていた。キャロット姫は、ちらっと、その食べ終わった皿をみた。イカも食べてる。イカも食べ過ぎると、猫には毒なのだ。キャロット姫は黙ってることにした。本当に光の戦士なら、たぶん、大丈夫なはずよ。

「我々は、姫の欠けたお尻を捜している」

と、王様が言うと、横から、大賢者が手を上げた。

「はい、おじいにゃん、どうぞにゃん」

「わしは、おじいにゃんではない。プ・リン・パラモード・チョコパイ・バナナ・アップルみかん・ロドリゲス・チャン・マーク・ソー大賢者じゃ」

「にやるほど！ 大賢者プにゃ。おにゃにゃ、みたいにゃ」

「プではない、ちゃんと聞け。プ・リン・パラ…… マーク・ソーだ」

「にやるほど！ 大賢者クソーにゃ。どうりで臭いにゃ」

「違う、ちゃんと聞くのじゃ」

「もう、いいから、プリンにすれば」

「にやるほど！ デザートはプリンにするにゃ」

この時より、大賢者プリンと呼ばれるようになる。まやちゃんが、デザートを食べ終わった。

「それで、我々は、姫の欠けたお尻を捜している」

と、王様が言うと、横から、大賢者プリンが手を上げた。

「はい、おじいにゃん、どうぞにゃん」

「わしは、おじいにゃんではない。プ・リン・パラモード・チョコパイ・バナナ・アップルみかん・ロドリゲス・チャン・マーク・ソー大賢者じゃ」

「にやるほど！ 大賢者プリンにゃ」

「プリンではない、大賢者クソーだ」

「まやちゃん、生まれ変わっても、名前がクソはいやにゃ」

「だから、プリンでしょ」

「にやるほど！ プリンもう一つ食べるにゃ」

まやちゃんが二つ目のプリンを食べ終わった。

「それで、我々は、姫の欠けたお尻を捜している」

と、王様が言うと、横から、大賢者プリンが手を上げた。

「はい、おじいにゃん、どうぞにゃん」

「わしは……」

大賢者プリンは、プルプル震える姫の右手を見てしまった。

「おほん。つまり、キャロット姫の病気は、世界が崩壊する、その前触れだと思いのじゃ」

大賢者、なんでも大げさに物を言う。

「それは大げさだろ。いくら姫のお尻が欠けたからって、世界まで崩壊するかい。しないよ。姫が死んだって、ほら、また創れば良いでしょ。大げさ、大げさだよ」

と、王様とキャロット姫の目が合った。

「このクソおやじ。よくも言ったな」

「にゃんだって。ここには何人クソさんがいるにゃ」

「わしは、プリンじゃ」

「にやるほど！ プリンもう一つ食べるにゃ」

「食べなくていいの！」

その時、キャロット姫はひらめいた。

「そうか、そうなんだ。私が世界なのよ。私が病気になると、世界が病気なのよ。

だから、私の呪いを解くために、悪しき魔導師を倒しに行くのね」

キャロット姫の目はキラキラ輝いていた。王様は感心していた。大賢者は、何か違うような気がしていた。まやちゃんは、何かを見つけた。黒い、こそこそ動く何かを……。

そして、我慢出来なくなり、その黒いもののすぐそばに、飛び移った。

「にゃんだ、これは？」

手で、つんつん、つんつんと突つつく。その黒いものは、突つつかれる度にゴソゴソ逃げる。

「あっ。虫にゃ」

まやちゃんは、大喜びです。

「いくにゃ。ねこパンチ！」

と、王様が止めに入る。ねこパンチが一発虫に当り、額に傷をつける。しかし、次の、ねこパンチをくらいながらも、王様は、必死でまやちゃんを止める。

「ま、まった。まってくれ」

そして、その虫を抱きかかえる。虫は平気だが、王様は、ねこパンチにやられ、額から、たらりと血が流れる。

「きゃあ！ 何それ！ 巨大ゴキブリじゃん」

巨大ゴキブリとは、この世界に太古(?)からいる、巨大昆虫型のモンスターである。たいして攻撃力は無いが、通常は集団で襲ってくる。暗いところ、食料がいっぱいあるところを好む。

「いや、これは、わしの、ゴキちゃんだ」

「ゴキちゃん？」

「ペット、ペットなんだ」

「ゴキブリをペットにして、放し飼いかよ。だいたい、ペットって、猫とか犬とかじゃん。どこのバカがゴキブリ飼うんだよ」

「まやちゃん飼猫にゃ。おかあにゃんが、ねこカンとカリポリくれるにゃ」

「ほほう。飼猫であったか。それで、礼儀正しいのじゃな」

「そうにゃ。そして、お家に入ってきた虫をねこパンチすると、ご褒美くれるにゃ。まやちゃん、虫の退治係にゃ」

「なるほど、それで、わしの魔法で呼び出すこととなったのじゃな」

「どう言うことにゃ？」

「つまり、他の世界の虫退治の光の戦士を呼び出していたのじゃ」

ただの白猫が、光の戦士って、メイドちゃんと合体してるし。

「そんなこと、どうでもいいの。ばかおやじの放し飼いのゴキブリなんとかしてよ」

「にやるほど。ねこパンチにゃ」

「まて、まってくれ。ちゃんと、虫かごで飼うから、ねこパンチは止めてくれ」

「だめ、絶対だめ」

「キャロット姫、そう一方的に」

「うるさいよ、ジジイ」

「そうにゃ。動けないように足もいじゃえば良いにゃ」

「なるほど」

と、言うと、王様は巨大ゴキブリの足をもいだ。姫は気持ち悪くなった。王様はさも愛しいと、ゴキブリに話しかける。

「だから言ったでしょ。ちゃんと虫かごに入れてなさいって。ゴキちゃんは、そうやって、時々逃げ出すから、足をもがれちゃうんだよ」

巨大ゴキブリの出現で、食事はお開きとなる。四人？ は、王の部屋へと移る。

「まやちゃんよ、汝を光の戦士とする。早く平和を取り戻すように」

「何のことにや？」

「はい、って言うの。言いなさいっててば」

「……」

「まやちゃんの好物はなんじゃ」

と、大賢者プリンが助け舟を出す。

「シャケトバにや」

と、キャロット姫がひらめく。

「はい、と、言って、虫退治するだけよ。虫退治したら、シャケトバいっぱいもらえるわよ」

「本当にや？ シャケトバいっぱいにや」

「おほん」

王様が咳払いする。

「はい、にや。虫退治して、シャケトバにや！」

しかし、王様は少し心配になった。

「まやちゃんだけで、大丈夫かな」

少し考え込む。

「確か、姫は、ヒーラーだったな。魔導師は…… 攻撃魔法使えるのは、大賢者プリンしか残ってないし。

すまぬが、二人でまやちゃんを助けてくれ。

大賢者様、その手はなんです」

大賢者は手を出していた。

「最初の資金は王様が呉れるはずじゃが」

冒険の最初って王様が資金くれるんだよね。でも王様のわりにちょっぴとしかくれない。

「おお、すっかり忘れていた。どれどれ、おや、む？ とりあえず、まやちゃんに渡しておこう」

大賢者プリンに財布を取られて、王様はダラ銭しか持ってなかった。普通は千ドン（この世界のお金の単位はドンである）渡すのだが、百ドンしかなかった。大賢者プリンに気づかれないように、百ドンをまやちゃんに渡す。千でも少ないのにたったの百。

「これ何にや」

と、まやちゃんが百ドンを良く見ようとする。王様はあわてた。

「しまっておきなさい。大事にしないとだめである」

「どうしてにや」

「お店で、それとシャケトバを交換してくれるのだ」

「にやるほど。しまうにや」

こうして、まやちゃん、キャロット姫、大賢者プリンの三人は、世界を救う冒険の旅に行くこ

ととなった。キャロット姫は、新調のマントを着た。大賢者プリンは、新品のローブを貰った。もちろん、それを着る前にお風呂に入った。まやちゃんは、王様が太って着れなくなった光の鎧と、光の兜、光の盾、光の剣を渡された。着けようとするのだが、レベルが足りなくて着れない。しかたないので、レザージャケットに腕に装着する小型の盾に光の短剣を渡された。

「まやちゃんだけお古にゃ」

「しかし、本物の初心者用光のセットじゃ。通常のものより効果が二割増しじゃ」

レザージャケットの防御力は3。二割で0.6。小数点以下切捨てなので3のまま。盾も3。短剣も3

。 「そうよ、少しも……ふる、古くなってないわよ」

「まやちゃんだけお古にゃ。お古にゃ」

ここで、光の戦士の機嫌を損ねるのはまずい。王様は決心した。

「では、私のコレクションの中から、魔法のアイテムを、どれでも好きなもの、一つをあげよう」

「それも、お古にゃにゃ」

「なに言ってんの、まやちゃん。ケチのパパの気が変わらない内に、倉庫に行くよ」

キャロット姫はまやちゃんの手を引くと、さっと、二人で走り去った。

「では、わしも、何か選ぶかの」

大賢者プリンまで、嬉しそうに倉庫に向かう。

しかし、王様は、何か嫌な感じであった。まやちゃんだけにあげるつもりだったのに……。

倉庫の中は、さしてカビ臭くもなく、雑然とアイテムが並んでいた。入ってすぐに、各種武器が並び、鎧、兜、盾、その他特殊アイテムの順であった。

「困ったにゃ。どれを選べば良いにゃ」

その時、キャロット姫は、ひらめいた。

「そうだ、このボタンよ」

と、ボタンを押すと、どんな仕組みか分からないが、アイテムが並び替わった。

「あたし、これ」

と、姫は重そうな金の腕輪、ガントレット代わりに出来そうなぐらい太い、のを選んだ。腕につけると、手首から、肘近くまである腕輪？ であった。まやちゃんには何が起こったのか良く分からない。

「どうなったにゃ」

そこに、大賢者プリンと王様が入ってきた。

「やや?! 値段で並べ替えのボタンを押したな!」

と、言ったのは王様であった。姫の押したボタンは、倉庫のアイテムを、値段順に並べ替えるボタンだったのだ。

「そうよ。一番高いのは、わたしが貰ったよ」

と、自慢げに、腕輪を見せる。

「それは、力の腕輪（スペシャルゴールド）。確かに、姫、ヒーラーが装備することも出来るが、あまり、役立つ物ではないはずだったと思うがの」

「そんなこと言って、わたしが、これを選ぶの止めると思う。どうせ、あんたが欲しいんでしょ」

「わしは、そんな重いもの……」

貰ってすぐ売ってしまえば、すごい金持ちだなと思いはした。

「旅に出るなら、これじゃな。わしは、これを貰おう」

値段順では、十番目ぐらいの小さなからくり箱を手にした。

「そんな箱なんになるの」

「からくり倉庫じゃ」

「からくり倉庫？」

「この中にアイテムを入れると、大きさも重さも千分の一となるのじゃ」

「そうなんだ。まやちゃんはどうするの？」

まやちゃんは倉庫を見回す。そして、ひらめいた。

「このボタンにゃ」

姫が押したボタンを、まねしてもう一度押した。アイテムが並び替わる。

「これにゃ。残った中で一番にゃ」

「あっ、待ちなさい。だめ、だめだってば。ああ、つけちゃった」

まやちゃんを選らんだのは、とても綺麗な首輪であった。真ん中に素敵な音色の鈴まで付いていた。しかも、その鈴は本物のダイヤで作られた鈴なのだ。

「どうしてだめにゃ」

「だって、ボタンを押したでしょ」

「値段順にゃ」

「そうだけど。最初は高い順。次に押すと、安い順なのよ」

「にゃんで、どうしたら良いにゃ」

「まあ待て。確かに安い順だが、その首輪が安いとは思えん。たぶん、何のアイテムか分からないのだろう」

「どう云う事」

「特殊アイテムで、その働きが分からない間は、値段不明で、一番安いに並ぶのじゃ」

「ふうん。でも、使い方はどうやって分かるの」

「さあ、どうだったかの。わしらが冒険したのは、もう大分昔の事じゃ。多分、使うと分かるのじゃな。それで、首輪をつけることが無かったので、未だに不明なのじゃろう」

「じゃあ、まやちゃんこれで良いにゃ」

王様が重々しく告げる。

「さあ、光の戦士のパーティよ。今こそ行かん！」

「わーい。パーティ行くにゃ」

キャロット姫は、そう言うと思った。大賢者プリンは、先に言われて悔しかった。

[ここまでをセーブしますか? -- はい]

旅の目的：酢ライムは強いにゃ

城から出る。辺りは草原、道が北と東に伸びている。先頭がまやちゃん。その後に、キャロット姫、大賢者プリンと続く。まやちゃんは西の草原に行く。

「まやちゃんどうしてこっちなの、この先は山で、その山はとても高くて、越えられないのよ」
姫が問う。

「虫がいるにゃ」

「どうして」

「さっき、おじいにゃんに聞いたにゃ」

「わしは、おじいにゃんではない、……」

姫ににらまれ、大賢者は口ごもる。

「何て言ったのさ」

「だから、こちらが、にしの方角じゃと」

「ほらにゃ、むしの方角にゃ」

「だめだ、まやちゃんまで、おやじギャグに毒されている」

その時、どこからか派手な音楽がなる。

ビロビロリー！

”酢ライム” が現れた。

酢ライムとは、どこにでもいる、レベルの超低いモンスターである。ベタベタぬるぬるしていて、食べると酸っぱい。

音楽が軽快で、急げ急げ、頑張れ頑張れ、の感じに変わる。

「どうするにゃ」

「倒すのじゃ」

「まやちゃん、酸っぱいの嫌いにゃ」

「嫌いでも倒すの」

「にゃにゃ、剣が抜けないにゃ」

まやちゃんは、光の剣が抜けない。

「抜けないも何も、そんな、肉球の付いた手で剣が持てる訳ないでしょう。丸い手の猫ロボットが何でも持てるのは、漫画だからなの」

「にやるほど、漫画ににやるにゃ」

「なれないの。それより、他に何か武器は無いの」

「にゃいのにゃ」

「おぬし、さっき店で何か買ってなかったかの」

「にやるほど」

シャケトバを出す。

「シャケトバ食べるにゃ」

まやちゃんが、シャケトバを食べる。すると、酢ライムが攻撃してきた。姫にベタリと張り付く。ほとんどダメージは受けない。

「うえ。気持ち悪。酸っぱい」

気分が悪くなる。そして、

「わたし、何もしたくない」

と、姫は戦意を失う。

「大変にゃ。姫にゃにゃが、やる気にゃしにゃ」

「ううむ。まやちゃんが、シャケトバ食べたから、酢ライムの番になってしまったのじゃ」

「でも、どうすれば良いにゃ。武器もにゃいしにゃ」

大賢者は気づく。

「まやちゃんや、爪じゃ」

「爪にゃ」

「まやちゃんの爪は、猫の爪と言って、立派な武器じゃ」

「にゃあんだ。ねこパンチで良いにゃ」

「そうじゃ、ねこパンチじゃ」

「いくにゃ。ねこパンチ」

バシ、バシ。バシ、バシ。

ところが、酢ライムには、まったく利かない。まやちゃんの爪が、ちょっと酸っぱくなっただけである。

「そうじゃ。酢ライムには、魔法攻撃であった」

「なにい。それじゃ最初から、お前が魔法かけれよさ」

姫は精一杯どなったつもりだが、何か力が入ってない。

「シマッタ。何もしないにシテシマッタ」

その時、酢ライムの攻撃が、大賢者にヒットした。

「ふふ、愚かな。この大賢者プリンさまに、レベル百五十のわしには、そんな攻撃など……、うぐ、ぐは、ぐへ……のどちんこプツン！」

高齢になると、体力が減り、物理攻撃に弱くなるのであった。

「にゃんにゃ。おじいにゃん、死んでるにゃ」

大賢者プリンは、こっぴはずかしい棺桶になっていた。魔法攻撃できるのは、大賢者だけである。

「どうするにゃ」

「どうもこうもないわ。逃げるよ、まやちゃん」

「おじいにゃんは、どうするにゃ」

「そんな場合じゃないでしょ」

光のパーティは、酢ライムから逃げのびた。

「ああ、びっくりした」

姫は元に戻って、元気になっていた。

「でも、大賢者プリンに悪いことしちゃったね。置いてけぼりしてさ」

「後ろにいるにゃ」

「えっ」

姫の後ろに棺桶が付いてきていた。

「何これ、だっせー。棺桶じゃん」

姫の必殺技

「これからどうするにゃ。おじいにゃんも、死んでるにゃ」

姫がひらめいた。

「教会よ。教会で生き返るのよ」

「どうしてにゃ」

この世界では、教会で復活出来た。それで、城に戻ることにした。城の城下町の教会へ行って、とりあえず、大賢者を復活してもらおうのだ。

城下町の入り口の人に話しかける。

「にゃ」

「こんにちは」

「にゃにゃ」

「こんにちは」

「にゃにゃにゃ」

「こんにちは」

「にゃ……」

「止めなさい！ その人は、こんにちはおじさんよ。話しかけても、こんにちは、しか言わないの」

しかたがないので、隣のおじさんに話しかける。

「にゃ」

「ようこそパンプキン城へ」

「その人は、ようこそおじさん」

「どうしてにゃ」

「昔からそこに立ってて、それしか言わないの」

「仕事はにゃにしてるにゃ」

「遊び人なの」

城下町は小さい。教会と店と宿しかなかった。

「シャケトバ買うにゃ」

「シャケトバはいいから、教会でしょ」

二人と棺桶は教会に入った。教会にはヒゲを生やした神父さんがいた。

「何が望みかな」

「プリンにゃ」

「プリンはありません」

「じゃ、プ、にゃ」

「プはありません」

「じゃ、クソー、にゃ」

「クソはありません」

「にゃにゃ？ クソはどうしたにゃ？ しにゃいのにゃ？ がまんしすぎにゃ」

「違うでしょ。この棺桶でしょ」

「にやるほど。棺桶あげるにゃ」

すると、神父は、お祈りを始める。

「いっしょに祈りなさい。大賢者プリンの魂よ、安らかならんことを」

それで、棺桶は消えた。

「棺桶消えたにゃ。よかったにゃ」

「ああ、良かった。これですっきり……って、ダメじゃん。

返せ、棺桶返して」

「どうしたにゃ」

「埋葬してどうすんだよ。生き返らすの」

「そうにゃ」

神父は困った顔をする。

「裏の墓地から掘り出してくれ。埋めるのは自動だが、掘り出すのは肉体労働での」

姫は、教会の裏に墓地なんて有ったかな、と思ったが、まやちゃんと、教会を出た。

「有るじゃん」

なぜか、それで、城下町は、教会と店と宿と墓地になった。十字架をどけて、棺桶を取り出す

。

まやちゃんは、ふと思った。

「十字架のお墓って、どんな宗教にゃ」

「知らない」

「おじいちゃんの宗教にゃ」

「違うわよきっと」

「どうしてにゃ」

宗教が違うお墓に埋められるのは、変じゃないのか。

「だって、わしはモントじゃ、って言ってたも」

まやちゃんは、必死に考え込んでいる。

「どうしたの」

「モントって、にゃんにゃ」

「たまには自分でヘルプで調べなさい」

「ヘルプって、にゃんにゃ」

「カブトムシの唄よ」

「にやるほど、虫か、ねこパンチにゃ」

そして、まやちゃんは、ひらめいた。

「おじいちゃんが、モントでヘルプで虫にゃ。だから、おじいちゃんに、ねこパンチにゃ」

「違う！ 絶対違う」

「あんまり怒ると、シワが増えるにゃ」

「いいから、教会に行くよ」

「また教会にや。まやちゃん、神父にやん苦手にや」

「どうして」

「クソがまんしてるにや」

姫は電撃のムチをふる。姫はお仕置きする者らしい。

「セカンドスパーク！」

ピシ。

「全然きかにやにや」

「だから、二回目にスパークするの」

と言うと、もう一度、電撃のムチをふる。

ビリビリ、ドッカン！ まやちゃんは、ピューと飛んでいく。

姫は、ひらめいた。

「そうだ、酢ライムにこれ使えば良いんだ。これからは、もう、大丈夫よね、まやちゃん。え、どこ、まやちゃんどこ行ったの」

「ここにや。姫にやんのドッカンにや」

神父さま臭い？

教会にはヒゲの神父さんがいた。

「何が望みかな」

「プリンにゃ」

「プリンはありません」

「じゃ、プ、にゃ」

「プはありません」

「じゃ、クソー、にゃ」

「クソはありません」

「やっぱり、がまんしてるにゃ」

姫が切れた。

「じゃっかましい。セカンドスパーク！」

まやちゃんは、一回目のムチで、大げさにコケた。それで、二回目のムチは、神父さまに当る

。

ビリビリ、ドッカン！ 神父さまが、ピューと飛んでいく。

「すごいにゃ、大急ぎでトイレ行ったにゃ」

ボロボロの神父さまが戻ってくる。

「何が望みかな」

「プ……」

姫がまやちゃんの腕をつかむ。

「わたしが言います」

「まやちゃんが言うにゃ」

「わたしが言うの」

「にゃ？ お姫にゃんが、クソーって聞けるにゃにゃ」

「聞けるわよ」

「じゃあ、クソーって聞いてみるにゃ」

「ク、……って、違うでしょ」

「がまんしてるにゃ」

「してない」

まやちゃんは、ひらめいた。

「がまんのしすぎで、お尻が欠けたにゃ」

問答無用の姫のムチが飛ぶ。

「セカンドスパーク！ スペシャルセット！」

姫は失敗した。

「やっぱりにゃ」

「やっぱり？」

「そうにゃ。スペシャルセットは期間限定にゃ。もうやってないにゃ」

「そうなんだ。って、期間限定かよ」

ボロボロの神父さまが言った。

「何が望みかな」

「大賢者プリンにゃんを、復活にゃ」

「初めからそう言えよ」

神父さまは頷く。

「それには、百五十万ドンが必要である」

ピッと音がして、“所持金が足りません”の看板が現れる。どうも、その看板は、まやちゃん達にしか見えないらしい。

「親切な看板にゃ」

「そう言う問題じゃないでしょ。でも、どうしてそんなにお金がかかるの」

神父さまが答える。

「それは、大賢者プリンがレベル百五十だからじゃ」

「でも、あたしたち、お金ないの、この子、光の戦士よ。だから、まけてよ」

神父さまの態度が変わる。

「うーむ。お客さんには、かなわないね。では、百四十九万ドンでどうだい」

姫はびっくりした。

「ええ、値切れるの」

「値切るってにゃんにゃ」

と、まやちゃんが姫に聞いた。姫は、生き生きした顔で、腕まくりしながら答える。

「女の真剣勝負のことよ」

「にやるほど。って、剣が抜けにゃいにゃ」

まやちゃんも剣で勝負しようと、光の剣を抜こうとするが、ねこの手では、やっぱり剣が握れない。

「抜かなくて良いの」

「まやちゃんも真剣勝負にゃ」

「わたしがするの」

「にゃ？ お姫にゃんが、クソーって聞けるにゃにゃ」

「聞けるわよ」

「じゃあ、クソーって聞いてみるにゃ」

「ク、……って、違うでしょ」

「でも、所持金ゼロにゃ」

ボロボロにされても、神父さまは、その言葉を聞き逃さない。

「なにい。お客さん、ひやかしたら帰ってくれ」

と、二人と棺桶は、外に出されてしまった。

キャロット姫がいつになく、寂しげな顔をしている。

「これからどうしよう。役に立たなくても、居ないと寂しい」

「誰のことにゃ」

姫は大賢者の名前を度忘れした。

「ええと、あの、役立たずのよぼよぼの、なんて言ったっけ」

「くそジジイにゃ」

「そう、大賢者クソーよ」

「やっぱりそうにゃ」

姫は何か違う、と思ったが、まっいいか、と納得した。

「もう生き返らないのね」

「の、の、に、にゃ」

「何それ」

「ここに書いてあるにゃ。の、の、に、にゃ」

それは、教会の壁の張り紙だった。

「墓の隣の小屋に行、って、漢字飛ばして読むな」

「まやちゃん、小屋に行くにゃ」

「ごまかすなって、でも、これじゃ、まるで盲導犬ゲームじゃん」

「獯猛犬にゃ。そんな怖い犬きらいにゃ」

「違う、盲導犬」

「どうも犬にゃ。話しかけると、どうも、って言うにゃ。遊び犬にゃ」

「違うってば。盲導犬」

「もう、どけん、にゃ。そこどけ、まだどけん、もうどけん、にゃ」

「この話して、どこまで伸ばすつもり」

「もうどうにもでけん、にゃ」

「張り飛ばすぞボケ」

まやちゃんは、姫の袖を引っ張る。

「ちゃんと読んでにゃ」

姫はもう一度、張り紙に目を通す。

「墓の隣の小屋に池、って何これ。小屋なんて無いし、池って、行けの間違いでしょ」

まやちゃんの示す先に、小屋があった。

「小屋じゃん」

そして、まやちゃんが、その小屋の戸を開けて見せる。池があった。

「池じゃん」

それで、城下町は、教会と店と宿と墓地と小屋と小屋の中の池になった。

二人と棺桶は、小屋の池の前に行く。

「普通、小屋の近くに、また張り紙があったり、今まで居なかった人が居たりするのよね」
きよろきよろしたり、小屋をぐるりと回ったりするが、何もない。

「何もないにゃ」

姫も困る。

「おかしい。絶対おかしい。でも、何かイベントの起こる条件が足りないのかも」

「条件にゃ」

まやちゃんは、考え込んでいる。

「どうしたの」

お握りを出す。

「お握り？ 私の好物。くれるの」

「まやちゃん、食べるにゃ」

食べ出す。

「考え込んでたのはなんだー」

「そうにゃ、条件ってなんにゃ」

姫はうんざりね、と思いながらも、なげやりに答える。

「フラグのことよ、フラグ。まだフラグが立ってないのよ」

「にやるほど。ポイトにゃ」

まやちゃんが、池に何かを投げ入れた。ポチャリと音がする。

「何したの」

「カエルにゃ。カエルを池に足すにゃ」

「フログを足すね、って違うじゃん」

「にやるほど。これにゃ」

シャケトバー一番のステッカーを出す。

「何それ」

「シャケトバの、付録を出す、にゃ」

「違うってば、って何これ」

姫の足もとを、金色のカエルが、ぴよんぴよん飛んでいく。

姫は、ひらめいた。

「棺桶よ。棺桶を池に入れるの」

「どうしてにゃ」

「そうすると、女神様が現れて、おまえの落とした棺桶は、金の棺桶か、銀の棺桶か、って聞くのよ」

「にやるほど。金の棺桶もらって、売るにゃ。お金持ちにゃ。教会で復活にゃ」

「違うでしょ、って、おい」

ぼちゃん、まやちゃんは、棺桶を池に入れた。時間だけが過ぎていく。

「女神にゃん、来ないにゃ」

「えへ。間違っちゃったみたいな。

「まやちゃん、取ってきて」

「水苦手にゃ」

「だって、まやちゃんが落としたんでしょ」

「まやちゃん、泳げないにゃ」

「つべこべ言わずに、行けよってさ」

と、姫は、まやちゃんを突き飛ばす。

「にゃにゃ」

と、まやちゃんは池に沈んでしまった。

すると、池の水がぐるぐる渦を巻き、女神様が現れた。右手に金のまやちゃん、左手に銀のまやちゃんを持っている。

「お前の落としたのは、この金のまやちゃんか、それとも、銀のまやちゃんか」

と、女神様は聞く。姫は迷わず答える。

「金のまやちゃんですわ、女神様」

「では、お前に、この金のまやちゃんを返してやろう」

と、金のまやちゃんを渡してくれた。そして、池に沈んでゆく。

「うそついちゃだめにゃ」

「きゃ。金がしゃべった」

「ちがうにゃ、まやちゃん、金になっちゃったにゃ」

「すごーい」

「すごくないにゃ。どうするにゃ」

姫は、ひらめいた。

ぼちゃん。

「姫にゃん、どうして池に飛び込むにゃ」

沈みながら、姫が言う。

「まやちゃん、うまくね」

すると、池の水がぐるぐる渦を巻き、女神様が現れた。

「お前の落としたのは、……」

まやちゃんは、迷った。

”まやちゃん、うまくね” を思い出す。姫にゃんの好物。

「そうにゃ。お握りの姫にゃ」

それで、まやちゃんは、金に、姫は、お握りになった。

「どういうことかしら、まやちゃん」

「うまいにゃ」

まやちゃんは、姫の焼き海苔になっている髪の毛を少しだけ食べてみた。

「食べちゃだめ」

「焼き海苔にゃ」

「あんたのせいでしょ」

「よかったにゃ」

「よくない」

復活？ 大賢者プリン

金のまやちゃんとお握りの姫は、考え込んだ。

「だめにゃ」

「どうして」

「頭固いにゃ」

姫は、まやちゃんの頭をこつこつ叩く。

「がちがちじゃん」

「姫にゃん、脳みそ梅干」

「どうしよう」

「どうするにゃ」

「こんなとき、嘘でもいいから大賢者プリンがいたらな」

姫は、ひらめいた。

「そうよ、嘘よ」

「嘘はダメにゃ。嘘ついた罰にゃ」

「違うの。いい、ちょっと耳かして」

「はい、にゃ」

まやちゃんは、これも金になった耳を外して姫に渡す。

「すごい、外せるのね、って、違うじゃん」

そして、二人はひそひそ打ち合わせをした。姫は、教会に神父さんと呼ばに行く。まやちゃんはポーズを決めてる。

「神父さんこれよ」

「なんと、こんなに大きな金の像を、この池から見つけた」

「そうよ。これなら、百五十万ドン以上でしょ」

神父さんは、疑いの目で見ると見る。

「どれどれ、ふむ、ふむ、おお、これは」

「ちょっと、どうなのよ」

「イヤー、良い物見させてもらいました。これは、今から、二百年ほど前の、ミンミン王朝の時代の作ですね。しかも、状態がいい。少なく見積もっても……」

「高く見積もれよ」

神父さんは、しまったの顔をして言う。

「二千万ドン」

「だめ、四千万ドン」

「いやあ、それは厳しい。おまけして、三千万ドン」

「ええっ。それじゃ千万ドンも損じゃん。

なかを取って、五百万ドンの損でどう？」

「と、言うのと」

「だから、三千五百万ドンよ」

「何故そうなるの。計算が合わないような……」

「だって、さんごうドンって言うでしょ」

「なるほど。さいごうドンには、かないません。

その手は何ですか」

姫は手を出していた。

「おつり。三千五百万ドンから百五十万ドン引いたおつりよ」

「おつりと言われても、そんな大金は、……」

「誰かから借りれば良いでしょ。どうせ、もっと高く売れるんでしょ」

確かに、と、神父さんは思った。ただの金の塊に戻しても、五千万ドンの価値はあると思えた。神父さんはいろんなところからお金を集めて、おつりを払った。

「おまけで、状態異常も直してね」

「いやあ、お客さんにはかないませんな」

姫は指で示す。

「そしてね、棺桶は池の中だから」

「おや、そうですか」

と、言うのと、神父さんは池に入っていく。池の真ん中でも、膝ぐらいの深さしかない。そして、棺桶を取り出してきた。

「じゃあ、教会に行きますか」

「はい、にゃ」

神父さまは、キョロキョロする。

「今なにか、声が」

姫がまやちゃんのまねで答える。

「はい、にゃ、って、まやちゃんの話し方がうつっちゃってさ」

「そうですか。そういえば」

神父さんは、キョロキョロする。姫は神父さんの背を押す。

「いいから、行きましょう」

まやちゃんも歩き出す。神父さんは、びっくりした。

「あ、歩いている。金の像が、歩いている」

「いいから、からくり、からくりなのよ」

「ああ、からくりね。でも、しかし」

姫は背を押す。

「何か、……」

姫が切れた。

「ごちゃごちゃ、うるせーんだよ。セカンドスパーク！」

なにはともあれ、大賢者は復活し、姫とまやちゃんの状態異常が直った。そして、訳の分からない大賢者を引っ張り、金の像がまやちゃんに戻り呆然とする神父さんを残し、走って逃げた。

「やっと、復活した」

「おじいにゃん、良かったにゃ」

「わしは、おじいにゃんではない、いや、おほん、どうもじゃ。

歳は取りたくないの」

それで、また城を出た。草原に行く。

ビロビロリー！

”酢ライム” が現れた。

「わたしに任せて」

ピッと音がして、”モンスターの先制攻撃”の看板が現れる。

「便利な看板にゃ」

「そういう問題じゃないでしょ。酢ライムが先に攻撃してくるのよ」

酢ライムの攻撃が大賢者にヒットした。

「うぐ、ぐは、ぐへ……のどちんこプツン！」

大賢者が棺桶になった。

「ほらね」

「にやるほど」

「こいつ使えねーよ」

「短い一生にゃ」

こんにちはおじさんのヒミツ

仕方が無いので、まやちゃんと姫はまた城に戻った。こんにちはおじさんと、ようこそおじさんがいる。まやちゃんは、こんにちはおじさんに話しかける。

「にゃ」

「こんにちは」

「やめろってば」

まやちゃんは、口をもぐもぐしている。

「にゃ」

「こんにちは」

「だから、こんにちはおじさんは、こんにちははしか言わないの」

まやちゃんは、口をむぐむぐしている。

「ちょっと、まやちゃん何食べてるの」

「シャケトバにゃ」

姫はちょっと不思議である。

「あら、全部食べてなかったの」

「違うにゃ。全部食べるにゃ」

そしてまた、おじさんに話しかける。

「にゃ」

「こんにちは」

良く見ると、まやちゃんは、おじさんから何か貰っている。

「にゃ。話しかけると、シャケトバくれるにゃ」

「ええっ。そんな話し聞いてないよ」

姫は、気が付いた。

「そうか。一番欲しいものをくれるのね」

「そうにゃ」

それで、姫は、ひらめいた。

「まず、これをゴミ箱に捨てる」

「にゃにゃ、棺桶捨てたにゃ。大変にゃ」

「まかしといて」

姫は胸を張る。

「そして、こんにちはおじさんに話しかけるのよ」

まやちゃんが、話しかける。

「にゃ」

「こんにちは」

シャケトバを貰った。

「おいしいにゃ」

「違うでしょ。今一番欲しいものは何」

「シャケトバにゃ」

「違うの、大賢者プリンでしょ」

「にやるほど。

にゃ」

「こんにちは」

プリンを貰った

「デザートはプリンにゃ」

「違うってば、しばくぞ、おのれは」

「とっても美味しいにゃ」

「だから、大賢者クソーだってば」

やっと、まやちゃんにも理解出来た。

「クソーって言ったにゃ」

「いいから早くしなさい」

「姫にゃんが、クソーって」

「あんたまさか、クソーを貰うつもりじゃないでしょうね」

「あっ、またにゃ。また、クソーって言ったにゃ」

「ちゃんと、大賢者を貰うの」

「分かったにゃ。

にゃ」

「こんにちは」

棺桶を貰った。

「棺桶にゃ。戻ってきたにゃ」

「そうね」

「おいしくないにゃ」

「棺桶かじるなボケ」

騙した神父さんにまた会うのは気が引けるが、城下町には他に教会がない。ところが、……。

「教会ないよ」

「本当にゃ」

教会の有った場所まで行ってみる。教会の場所には立ち入り禁止のひもがあり、”この土地売ります”と立て札が立ててあった。

「売りにでている」

「臭かったからにゃ」

「どうして」

「クソ我慢してたにゃ」

「違うでしょ」

「真剣勝負にゃ。剣抜けないにゃ」

「抜くな」

「姫にゃんは出来るにゃ」

「出来るわよ」

「にゃ？ お姫にゃんが、クソーって聞けるにゃにゃ」

「聞けるわよ」

「じゃあ、クソーって聞いてみるにゃ」

「ク、……って、違うでしょ」

「さっき言ったにゃ」

「そう言う問題じゃないでしょ」

姫はガックリと体の力が抜けた。

「もうだめ、わたし、帰る」

「どうしたにゃ」

「人生に疲れた、の」

「ちんちんに毛がはえた、ってなんにゃ」

「聞き間違いするな」

「姫はつるつるにゃ」

「のぞくな。女にそんなものぶら下がってない」

「はい、はい、はい、にゃ」

「はい、は、一回でいい」

「ねこ灰だらけ、にゃ」

そこに、町のおじさんが歩いて来た。

「こんにちはおじさんにゃ」

「みんな同じ顔してるけど、別の人なの」

まやちゃんが話しかける。

「にゃ」

「こんにちは」

こんにちはおじさんだ。姫がびっくりして聞く。

「どうして、こんにちはおじさんが、ここにいるの」

「かけもちしてるのだよ」

まやちゃんが、姫のスカートをめくる。

「姫にゃんは、かけ尻にゃ」

「違うでしょ」

「クソの我慢しすぎはダメにゃ」

「我慢してないの」

「ドッカンって、かけたにゃ」

「そんなことで、欠けるかボケ」

「おじさんのもちは、欠けたにゃ」

おじさんの手に持っている、もちが、まやちゃんの歯型に欠け、まやちゃんはおもぐもぐしている。

「本当だ。おいらのもちが、欠けてる」

「かけもちにゃ」

「だから、何をかけもちしてるの」

「不動産業さ」

まやちゃんが考え込んでいる。

「どうしたの、まやちゃん」

「不動産業ってなににゃ」

姫も良く分からなかったが、一生懸命に答える。

「不動でしょ、だから、動かない。産業だから、……」

まやちゃんは聞いていない。こんにちはおじさんに話しかける。

「にゃ」

「こんにちは」

「トバもらってるな」

「にゃにゃにゃん、にゃにゃ

にゃにゃにゃ～にゃ」

「歌ってごまかすな。何の唄かも分からないし」

「舞上い、にゃ」

「そんな唄ないの」

「牛の蒸し焼きのヒット曲にゃ」

「牛、モー、蒸し焼き、むす、……って」

「続けて言うとファンにミンチにされるにゃ」

「そう言う問題じゃないでしょ。それに、“私の道”ってゴッドネーチャンの唄よきっと」

「違うにゃ。良く聞くにゃ。

にゃんにゃんにゃ～にゃ」

「歌うな。しかも、さっきと全然違うし」

「だから、白いクリスマス、にゃ」

「白、…… ホワイト、……」

「ビンゴ・ストレート・フライの唄にゃ」

「ストレートって、クロス、フライって、ビー？ 誰も気づかないよ」

「ボール・アウトの唄にゃ」

「だから、年齢制限あるダジャレは止めろ」

気づくと、こんにちはおじさんが、いない。

「やっぱ、帰るわ」

「元気でにゃ」

「あんたも一緒に来るの」

「やっぱり、お家で食べるにゃ」

「何を食べるの」

「もち、にゃ」

「どうして、ってまさか、もち帰り、って言うつもりじゃないでしょうね」
まやちゃんは、寂しげに遠くを見ていた。

王の間は、出発した時と何ら変化が無い。

「ここの部屋、見たことあるにゃ」

「当たり前でしょ。ここで、ちょっと前に光の戦士になったんでしょ」

「忘れないように、おしっこしとくにゃ」

「メス猫はマーキングしなくて良いの」

まやちゃんが、ごぼごぼする。

「ちょっと何してるの」

「毛玉にゃ」

「毛玉って、どうしてそんなにいっぱい出るの」

しかも、赤毛であった。まやちゃんは白猫なのだ。

「食べた時は、焼き海苔だったにゃ」

姫は、お握りになった時、まやちゃんに髪の毛を食べられたことを思い出した。

「って、あたしの髪じゃん」

「にゃにゃ、返すにゃ」

まやちゃんは、毛玉を姫の髪に貼り付けた。

まやちゃんと姫、後ろにちょろちょろ付いてくる棺桶は、王様の前に着いた。

「おお、随分と早く戻ってきたな」

と言いながら王様は、キョロキョロしている。それにつられて、まやちゃんもキョロキョロする。そして、王様のひげに噛み付いた。

「これ、わしのひげは、ねこジャラシじゃない」

「遊んで欲しいにゃ」

まやちゃんの瞳は黒く大きくなっていった。

「ちょっと、放しなさい」

姫がまやちゃんを放そうとして、お下げが揺れる。まやちゃんの鋭い目は、些細な揺れも見逃さない。姫のお下げに噛み付く。

「こら！」

姫に怒られ、びっくりしたまやちゃんは、棺桶の陰に頭だけ隠れる。棺桶に王様の目が留まる

。

「それは」

「ああ、これね。あれよ」

「棺桶にゃ」

王様が気づきそうになる。姫はあわてた。

「だから、これは、なんていうか～、ついて来るのよ」

「ほほう。それは、つまり」

「拾ったにゃ」

「拾った」

「そうにゃ。まやちゃんが、金になって、姫がお握りになったにゃ」

やばそうな話である。姫は話しを変える。

「ところで、パパ。教会はどうしたの」

王様は深刻な表情で答える。

「それが、どうも、悪質な詐欺に引っかかったらしいのだ。にゃにゃ詐欺と言うらしい」

「ああ、知ってる。電話でにゃにゃって言うんでしょ。へえ、そうなんだ」

「うむ。詳しいことは分からんが、その詐欺にやられて、神父さんは夜逃げ、いや、昼逃げしたらしい。しかし、あの神父さんがどうして騙されたのか、……世の中には知能犯っているものだ。おまえも気をつけないといけないぞ」

「違うにゃ。像を買ったにゃ。でも、かうはかうでも、飼い違いにゃ。だから、このべとべとは、焼き海苔だったにゃ」

姫の髪を指さす。

「神父にゃんは、おつり払うにゃ。元に戻って、走るにゃ、で、毛玉にゃ」

姫の髪を指さす。しかし、王様には、まやちゃんの話しがまったく理解出来ない。そして、姫は、ひらめいた。

「呪いよ。きっと、呪いなんだわ」

「呪い」

「そうよ、あたしの髪が変になったのも、教会も、大賢者プリンも」

と、棺桶を指さす。

「それが、大賢者プリンなのか」

「そうなの、ちょっと聞いて。とっても弱い。酢ライムにやられるのよ」

「なんと、大賢者プリンがそんなに弱くされているのか」

「そうにゃ。のどにゃんこ、プッチンにゃ。よぼよぼで使えないにゃ」

王様はひらめいた。

「おお、そうだ。世界のどこかに、“半分の葉”があると聞いたことがある」

「半分の葉？」

「そうだ。その葉を煎じて飲むと、あら不思議、年齢が半分になるらしい」

「本当にゃ」

王様は大きく頷く。手帳を見る。

「クエスト125 半分の葉を捜せ。だな。まだ継続中になっている」

「クエスト125って」

「サブクエスト」

「ああ、サブクエストはクリアしなくてもエンディング見れるんだよね」

「クエストコンプリートよりエンディング重視のパーティだったから、まだ幾つか残ってるはずだ」

「って、クエストって1から始まるの」

「そーだよ」

「って125って、レベル高くない。

私とまやちゃんてクリアできるの」

「普通無理だね。地味でマゾい、レベリン繰り返すしかないんじゃ」

「レベリン？」

「ちまちまモンスター狩るのじゃ」

「どのぐらい」

「一日2時間程度で、3ヶ月もしたら、マックスの半分ぐらいまでなってる。

ハイプレイなら、一週間ぐらいで、レベルカンストも夢ではない」

「ハイプレイ、カンスト」

「24時間ぶっとーし、一週間」

「いつ寝る！」

「たぶん、交代で操作するんだろ」

「ハイプレイ、廃プレイとも言う。人間止めますか、ゲーム止めますかって」

「でも、大賢者プリンは死んでるよ」

「うむ。それは、なんぎであろう。大賢者プリンよ復活せよ」

「なんで、なんでパパが復活させれるの」

「ああ、言ってなかったか。王は復活もするのだよ。しかも無料で」

パイプオルガンもどきの音楽が流れ、大賢者プリンは復活した。

大賢者のヒミツ

王の間は、なぜかいつも関係なさそうな人が、何人かちょろちょろしている。部屋の真ん中には長いテーブルがあり、四人はそこで、深刻に考え込んでいた。王様が口を開く。

「なるほど、それは、大変だ」

まやちゃんが自慢げに話す。

「そうにや。にやにや、にゃんにやにや、なのにや」

誰も突っ込みを入れる気分でない。王様が溜め息まじりに話す。

「なるほど、それは、大変だ」

まやちゃんが自慢げに話す。

「そしてにや、にやにやにゃん、にやにや、にや」

誰も聞いていないが、まやちゃんは絶好調である。王様が腕を組みかえる。そして、つぶやく

。

「なるほど、それは、大変だ」

まやちゃんが自慢げに話す。

「まやにや、にやにゃんにや、にやにや、にゃんにや」

まやちゃんは大喜び、が、大賢者は寝ていた。姫が気づく。

「寝るなボケ」

姫に殴られ、大賢者は目覚める。

「うぐ、ぐは、ぐへ……のどちんこプツン！」

大賢者が棺桶になった。残った三人は顔を見合わせた。

「弱すぎる」

「にゃんとも」

「困ったことだな」

「他にいないの」

「う～む、攻撃魔法が使えるのは大賢者だけのはずだが」

まやちゃんはお腹がすいた。テーブルをドンと叩く。そして、立ち上がって言った。

「にや～お。にや～お」

姫もつられて立ち上がりコブシを上げて言う。

「そうよ、私とまやちゃんだけで行く。世界のどこかにある”半分の葉”を探しに行くよ」

しかし、王様の表情は暗い。

「そうも行くまい。しかし、なあ」

「大賢者に聞けば良いじゃん」

「そうにや」

「こんな時の大賢者でしょ」

それで、王様はまた大賢者を復活させた。大賢者に聞く。

「誰かいないか？」

「つまり、わしでは駄目じゃと」

大賢者はどこか寂しげであった。そして、重い口を開く。

「いないことも、ないが、のお。しかし、あいつは、……」

と、周りでちょろちょろしていた一人の十歳ぐらいの少年が、「どっかん〜！」と、自分の口で言いながら、飛び出してきた。大賢者は頭をかかえる。他の三人はなんのことか分からない。

「お呼びですか、お師匠さま」

そう少年は、大賢者に向かって言った。

姫は、その少年を良く見た。真っ赤なハーフコートががぶがぶで、ロングコートになっている。ブーツも大きすぎて、ヒザにぶつかるので、無理に折り曲げて履いている。王冠のつもりなのか、それっぽい石を頭にちょこんと載せている。胸には、名札があり、マジ学者、オニオンと赤のインクで書いてあった。

「オニオン？」

「そうだ。爆炎のプリンス・マジ学者・レットオニオンとは、誰だろう、俺のことだ」

「ばっぷマンってなにや」

「あら、すごい省略ね。でもピッタリかも」

大賢者が、オニオンの肩を叩きながら言う。

「良かったな。素敵なアダ名が出来て」

「ええっ。素敵ですか？」

「そうにや。この人は、大賢者クソーにや。で、デジが、ばっぷマンにや」

「ぼ、ぼ、僕は、出っ尻じゃないぞ」

そして、まやちゃんは、ひらめいた。

「姫にゃんのお尻を拾ったにや。そして、自分のお尻にくっ付けたにゃん。それで、そんなにお尻が大きくなったにや」

さすがに、まやちゃんの説に賛同するものはいない。王様は心配になってきた。

「こんな子供で大丈夫か」

まやちゃんはしつこい。オニオンのお尻に、じゃれついてねこパンチしている。

「いくにや。ねこパンチ」

バシ、バシ。バシ、バシ。

オニオンもまやちゃんを無視して言った。

「俺は子供じゃない！ もう四十歳だぞ」

「ええっ。どうみても汚いガキじゃん」

大賢者が話す。

「だから、オニオンはハーフエルフなんじゃ。人間の四倍以上の寿命があって、確かに四十歳だが、人間なら十歳ぐらいと、……」

王様は、ますます心配になってきた。

「世間ずれだけして、人間性・人格に問題があり、精神年齢十歳のおやじも問題だが」

姫にも理解出来た。

「ガキのくせして、マジ四十歳ってことじゃん」

大賢者も頷く。

「そうじゃ。わしが、あの森で迷子になっていたオニオンを弟子にしてから、もう二十年も経つが、やっと足し算を覚えた。素直に覚えれば良いのに、変に理屈をこねまわすのじゃ」

まやちゃんは、すっかり夢中になっている。

「このお尻をにゃ、半分もらってにゃ、姫にゃんに付けるにゃ。解決にゃ。シャケトバいっばいにゃ。

でもにゃん、なかなか取れないにゃ」

ねこパンチしたり、かじったり。そんな、まやちゃんを無視して、姫がオニオンに聞く。

「ねえオニオン。いち、足す、いち、は？」

「なんて馬鹿な質問だ。市、足す、位置、は、市場に決まっているだろう」

まやちゃんとオニオンを除く三人は顔を見合す。王様がぽつりと言う。

「重症だ。病んでいる。彼は、重い心の病だ」

「なに言ってるのパパ。そんなこと言ったら、本当の病気の人に悪いでしょ」

大賢者が叫ぶ。

「ああ。わしが、わしの教育が間違っていた」

オニオンは決めのポーズをして、右手でピースをしていた。それを目ざとく大賢者は見つける

。

「おお、偉いぞオニオン。良くぞ正解した。そうじゃ、その指じゃ。答えは二じゃ」

オニオンは威張って胸を張る。

そして、まやちゃん、姫、オニオンの三人は、大賢者の若返りのため”半分の葉”を探しに冒険の旅に出ることになった。

城には、王様と大賢者が残った。王様が言う。

「大丈夫であろうか」

大賢者が答える。

「わしがパーティから外れたのでギャグの質が落ちるじゃろう」

王様は、はっとした。

「そうだったのですか大賢者様。酢ライムにやられて棺桶になるのは、命がけのギャグだった、と」

大賢者はどこか誇らしげに微笑んでいた。

[ここまでをセーブしますか？ ー ー はい]

三人は西へ向かう。

「ねえ、まやちゃん。やっぱりこっちなの。普通に道に沿って行く方が良いのじゃないの」

「むしの方角にや」

「むしの方角？ なぜ虫とか、お尻にこだわるんだ」

「あっそうか、オニオンはまだ何も知らないのね」

姫とまやちゃんは、事の次第をオニオンに説明する。

ビロビロリー！

”酢ライム” が現れた。

「えー、また酢ライム。いかげん違うモンスターじゃないと、読者も飽きちゃうよ」

「しかし、始めは酢ライムでレベル上げがセオリーでは」

まやちゃんが考え込んでいる。

「どうしたの、まやちゃん」

「セオリーってなんにや」

「臭い野菜よ」

「にやるほど」

オニオンは、醒めた視線で言う。

「ところで、そろそろ攻撃した方が」

「なに言ってんの、あんた攻撃しなさいよ」

「そうにや」

しゅしゅオニオンは攻撃する。

「魔法の粉！」

「まあ、なんか強そう」

「強いにや」

オニオンはザックをごそごそかき回して、“こな”を取り出す。そして、すたすた酢ライムに走り寄ると、ぱらぱらと、粉を降りかけた。

すると、酢ライムが苦しみだした。

「なんか、ザックから取り出すのは情けないけど、効いてるみたいね」

「来てるにや」

酢ライムが寄ってきて、まやちゃんにベタリと張り付く。

「にやにや。すっぱいにや。きもいにゃん」

そう言うと、仰向けに寝転がり、ごろごろを始めた。

「あら、大変、まやちゃんがやる気なしじゃん。あんた、何かけたのさ」

「これさ」

と、姫の目の前に白い粉を見せる。姫は、ちょっとだけ、なめてみる。

「ただの塩じゃん」

塩は酢ライムに少しは効くが、倒すには、とてもいっぱいかけないとだめなのだ。

「もう良いよ。私がやる。セカンドスパーク」

酢ライムは、姫の電撃のムチで倒すことが出来た。

ジャンチャカジャ〜ン！

”酢ライム”を倒した。経験値二とードンを手に入れた。

「お姫さますごいな。しかも、お金と経験値まで」

姫は、うんざりね、の顔でポケットをジャラジャラしながら言った。

「お金なら有るのよね」

「教会買えるぐらい、有るにゃ」

「ええっ。そんなにお金もちなんですか」

「そうよ」

「女神にゃんが、味方にゃ」

「だから、そのすっぱいお金は、あんたにやるよ」

オニオンは、二人がすごいレベルなんだと勘違いした。それ以来、二人に対する態度ががらりと変わった。

「姫の姉さん、ねこの姉さん、これからも、よろしゅうお願いします」

「そうよ、あんたも心入れ替えて頑張れば、あたいらみたいになれるよ」

「そうにゃ。それが、臭い野菜にゃ」

オニオンは、大げさに気がつく。

「あっ。セオリーとセロリ、なるほど、あっはははは。ねこの姉さんは冗談が上手ですね」

「なんか嫌味ね」

「嫌味にゃ」

高い山にや

その後、酢ライム二匹ほど倒すと、西の山脈に辿りついた。どこにも切れ目？ がなく通れない山脈が壁のように、北から南に連なっている。山脈の上の方は、初夏なのに雪が載っている。相当高い。

姫は、その山脈を指差し言う。

「ほらね、あんなに高いの。もう西に行けないのよ」

「虫も居ないしにや」

「ね、だから城まで戻って、北か東の道に行こうよ」

「酢ライムしか、いないしにや」

「そうでしょ。だから、……あら」

姫はキョロキョロする。お下げが揺れる。まやちゃんが飛びつく。

「ちょっと、なにしてるの」

「遊んで欲しいにや」

「だめ」

まやちゃんは、お下げに噛み付いて離さない。

「ちょっと、だめだってば」

「うぐ、ぐぐにゃん」

まやちゃんが、ちょっと離れた隙に姫はお下げを持ち上げる。

「だから、オニオンが居ないの」

「居ないにや」

そして、まやちゃんは、ひらめいた。

「かくれんぼにや。まやちゃんも隠れるにや」

「隠れなくて良いの」

「にゃにや、まやちゃんが鬼にゃん？ にゃら、姫にゃんが隠れるにや」

「違うってば」

「姫にゃん、見つけにや」

「あら、見つかったちゃった。えへ、っている場合かボケ」

まやちゃんは、自分の手で目隠しして言い始める。

「もーいいにゃにや」

姫は、無視した。

「姫にゃんは、まーだにゃにやって言うにや」

姫は、無視している。

「もーいいにゃにや」

姫は、無視する。

「姫にゃん、ちゃんと言うにや。いいにや。」

「もーいいにゃにや！」

姫は、やっぱり無視している。ところが、近くの草むらから声がする。

「もーいいよ！」

「このバップ野郎、本当に隠れてるんじゃないか！」

姫の怒りのムチが飛ぶ。

「セカンドスパーク！」

「ひや〜あ」

と、オニオンは爆発してピューと飛んで行く。

「あっ、オニオン見つけにゃ」

「そう言う問題じゃないでしょ。まやちゃん行くよ」

「自分でぶっとばしたにゃに、まやちゃんも一緒に行くにゃにゃ」

「そうよ、仕方ないでしょ」

オニオンの飛んだところまで行くと、姫の電撃で、オニオンはまだピクピクしていた。ピクピクしながらオニオンが言う。

「見えた、見えた」

「なにスカートのぞいてるんじゃない。しばくぞ」

「姫にゃん、口ボケにゃ」

「それを言うなら、口が悪いでしょ」

「姫にゃん、口が悪いにゃ」

「言いなおすな」

ピクピクしながらオニオンが言う。

「見えた、見えた」

姫がイライラしながら言う。

「だから、何が見えたのさ」

「なに、が、見えたにゃ」

「繰り返すな。変に聞こえるだろう」

「なに、が、見えるにゃ」

「言いなおすな。もっと変だろう」

オニオンが飛ばされた時、洞窟が見えたらしい。

「本当なの」

「本当にゃにゃ」

痺れが取れたオニオンが頷く。

「本当です。姉御。あっしは、ちゃんとこの目で見やした」

「そんなしゃべり方して、お前、どこの生まれなのさ」

すると、突然オニオンが泣き出した。

「えーん、えーん。迷子になって帰れないんだよ」

「そうにゃ。困ったにゃ。帰ったら迷子じゃ、にゃくにやるしにゃ」

「そう言う問題じゃないでしょ」

とりあえず、洞窟まで行ってみることにした。

オニオンの頼りない案内で、草むらを歩く。ハエが飛んでくる。

「にゃ。虫にゃ」

まやちゃんが飛びつく。

「止めなさいってば」

姫がまやちゃんに気をとられていると、オニオンが居なくなる。

「こら！ オニオン。隠れてないで出てきなさい」

草の陰からオニオンが飛び出てくる。

「はははっは。姫の姉御にはかないませんや」

ビロビロリー！

”悪いどオオカミ” が現れた。

悪いどオオカミとは、オオカミのモンスターである。あまり強くない。普通は集団で襲ってくる。しかし、まやちゃんのレベルが低いので、今回は一匹だけである。

なぜ”悪いど”と言われるかには、二つの説がある。その一つは、元々、”ワイルドオオカミ”と呼ばれていたはずだが、この地方のなまりで、ワイルドが悪いどに変わった。そして、もう一つは、独特の鳴き声にある。ワオーと鳴かず、言葉をしゃべっているように聞こえるのだ。

悪いどオオカミは吠えた。

「ねえちゃん。金貸してくれよ。ふん」

姫は腰に手を当て、怒っている。

「ほら、あんた達がバカやってるから、また変なの出てきたじゃん」

オニオンがビビりながらも言う。

「姉御、ここはお金を渡した方が」

「なに言ってんの。あれは、ただの鳴き声でしょ。意味分かってないよ、きっと」

「そうにゃ。分かってにゃにゃ」

「そ、そうなんですか」

「いい、じゃあ会話してみるから。良く見てなさい。きっと会話にならないんだから」

「だかにゃ」

姫は一步前に出ると言った。

「じゃあ、いくら欲しいの。五十六十三ドン欲しいのか」

悪いどオオカミは吠えた。

「ねえちゃん。金貸してくれよ。ふん」

姫は勝ち誇った顔で言い切った。

「ほら、ただの鳴き声じゃん。びびってないで、オニオン、早くやっつけなよさ」

「なよにゃ」

オニオンは、一人でぶつぶつ言っている。

「ええと、五十六十三ドンって、三つの数の足し算かよ。ええっ、こんなの、お師匠さまから習ってねえよ。ぎよぎよ、ブーツ履いてるから足の指使えねー、最悪じゃん」

オニオンは、混乱した。

「にゃにゃ、オニオン混乱にゃ」

「なんで、オニオンが混乱するの、仕方が無いね。

セカンドスパーク」

姫のムチが唸る。しかし、悪いどオオカミは、酢ライムより強かった。姫のムチだけでは倒せない。

「まやちゃん。頼んだよ」

「ほいにゃ。いくにゃ。ねこパンチ」

バシ、バシ。バシ、バシ。

ジャンチャカジャ〜ン！ 戦いに勝った。

一方、混乱中のオニオン。

「五九六三なら、ごろうさん、なのに、おいしいなあ。丸ないもんなあ。ごろうさん、ってなんだろう。ご、ご、そうか、ごろうさん、だ。ごろうさんは確か十四歳だった。だから答えは十四。へへ、俺って天才」

とりあえず、オニオンの混乱は回復した。そして、三人は洞窟の入り口に着いた。

当然、洞窟の中は薄暗そうで、気持ち悪かった。まやちゃんは中に入って行こうとする。

「ちょっと、まやちゃん。中に入るの」

「そうにゃ」

「ねこの姉さん、そいつは止した方が良くないんじゃ」

「にゃんでにゃ」

姫とオニオンは顔を見合す。

「だって、中に何があるか分からないしさ」

「そうにゃ。それを調べるにゃ」

姫はまやちゃんの肩をつかむと少し揺すってみる。

「大丈夫まやちゃん。なんか、とってもまともなこと言ってるんだけど」

「半分の葉を捜すにゃ」

「そ、そうね」

それで、今度はオニオンが言う。

「で、でもですね、少しは、様子を見てからにしてはどうでしょう」

姫も言う。

「そうよ、オニオンの言う通りよ。いきなり中に入らずに、外から、少し様子を見ましょうよ」

「にゃるほど。まやちゃん中見てくるにゃ」

と、洞窟に入ろうとする。

「だから、まってば。様子を見るの。ほら、オニオンやって見せなよさ」

「へい、がってんだい」

鼻先を親指でちょいとこすり、オニオンが洞窟の周り確かめる。

「痛いにゃ」

まやちゃんが叫ぶ。姫がまやちゃんを見る。

「どうしたの、まやちゃん」

爪が鼻に引っかかっていた。

「がってんだいのまねしなくて良いの」

「取ってくれにゃ」

「もう、なんで私がねこの世話するんだか」

と、今度は、オニオンの叫びが。

「出たよ、出た」

「なんだよ、オニオン」

「にゃんにゃ。おにゃにろん」

「まやちゃん、オニオンをにゃんこしゃべりするな」

「にゃにゃ。まやちゃん、ちゃんと言ったにゃ」

「ちゃんとじゃない」

「にゃにゃ。それじゃにゃんて聞こえたにゃ。姫にゃん言ってみるにゃ」

「お、って絶対言わない」

まやちゃんは、にやりと笑い、姫を指差しながら言う。

「姫にゃん、エッチにゃ」

「おまえ、意味分かってんじゃない」

オニオンは、悪いどオオカミに追いかけていた。

悪いどオオカミが吠える。

「ねえちゃん。金貸してくれよ。ふん」

姫とまやちゃんの攻撃が炸裂。モンスターを倒した。

ピロピロリー

姫のレベルがアップした。

まやちゃんのレベルがアップした。

姫は魔法を一つ覚えた。

まやちゃんは必殺技を一つ覚えた。

「あら、なんか魔法覚えちゃったよ」

「にゃにゃ、にゃんか卑怯技にゃ」

「卑怯じゃないの必殺でしょ」

「そうにゃ」

姫とまやちゃんも洞窟の前まで来た。いくら見てもただの洞窟の入り口。

「なんて、洞窟か名前ぐらい書いてないのかな」

「困ったにゃ」

ジャカジャカジャーン♪調子はずれのバンジョーの音が響く。

「困ったときは～♪ 僕らを呼んでね～♪」

ジャカジャカジャーン♪

メキシコの帽子に、ポンチョを着た三人組み。バンジョーを持った太ったヒゲの男にのっぼとちっちゃい男はサーベルを持っている。

「困ったときは～♪ 僕らを呼んでね～♪」

お助け三銃士～♪」

「銃持って無いじゃん、どこが三銃士なんだー！」

「りんご」

「なし」

「みかん」

一口食べる。三人そろって歌う。

「う～ん、ジューシー♪」

困ったときは～♪ 僕らを呼んでね～♪」

「この洞窟の名前は」

「”この洞窟”だねー、該当件数0件。検索文字を変えて試してみてねー」

「にゃんにゃ」

「じゃあ、洞窟」

「"洞窟"だねー、該当件数0件。うーん、見出し語にないのかもねー」

「じゃあ、全文検索で洞窟」

「"洞窟"だねー……」

「固まった」

「動かにゃいのにゃ」

「だっせー検索エンジン」

「使えにゃいのにゃ。キャンセルにゃ」

「困ったときは〜♪ 僕らを呼んでね〜♪」

「おまえらが一番の困りだ」

「"おまえら"だねー、該当件数0件。検索文字を変えて試してみてねー」

それで、魔法も覚えたし、必殺技も覚えたので、洞窟に入ることにした。しかし、オニオンは嫌な予感がするのであった。姫の姉御って、ヒーラーなのに今まで魔法使えなかったのか、……。そんなんで洞窟入っていいのか。

元気出してにゃ

洞窟の中はなぜか暗くなかった。たぶん、画面が見づらくなるからだろう。タイマツを毎回買うのも、明かりの魔法も面倒なだけだし。自然の洞窟ではなく、トンネルの様だった。

「ここって、昔、誰かが使っていたトンネルかな」

姫がポツリと言った。

「ブタにゃん、いるのにゃ。どこにゃ」

まやちゃんがキョロキョロする。

「あっ。トンネルでブタが寝る、なるほど、あっはははは。ねこの姉さんは冗談が上手ですね」
ビロビロリー！

”キラービン” が現れた。

キラービンとは、蜂の形をしたガラスビンのモンスターである。羽があって飛んでいる。お尻の毒針攻撃と特殊攻撃をしてくる。キラービーのしゃれのレアモンスターである。

「ほら、オニオン今度は男を見せなよ」

「ええっ。そんな、……」

オニオンはズボンを下げる。

「なにやってるんじゃボケ」

「姫にゃん、ボケじゃにゃいにゃ、ばっぷマンにゃ」

「そう言う問題じゃないでしょ。オニオン、早くやっつけなよさ」

「なよにゃ」

オニオンはパンツまで下ろして叫ぶ。

「激水流！」

腰のあたりから、ちよろちよろと水が飛ぶ。キラービンは平気だ。

「にゃははは。まやちゃんも激水流やるにゃ」

「しなくていい！ さっき覚えた必殺技を試すのよ」

「にやるほど。どこでもねんね！」

どこでもねんね、とは、戦闘中でも睡眠が取れる必殺技である。三ターンの間眠り続ける。HPとMPが全回復する、その間に、モンスターにやられなければ、……。

で、まやちゃんは、すやすや眠り出した。

「どいつもこいつも、仕方ない、セカンドスパーク・スペシャルセット！」

姫は失敗した。

「やっぱりにゃ。…… 期間限定にゃ」

まやちゃんは寝言を言っている。

「どんな夢見てるんじゃ」

キラービンの特殊攻撃がオニオンにヒットした。

ガシャンーン！

キラービンの特殊攻撃は、自爆攻撃である。ビンで頭を殴るのだ。

「のどちんこプツン、じゃないけどー」

キラービンは粉々に砕けた。オニオンは石の王冠のおかげで、気絶だけで助かった。

ジャンチャカジャ〜ン！ モンスターを倒した。

まやちゃんは目覚めた。

「ふにゃ〜。いい気持ちにゃ。にゃにゃ、オニオンのびてるにゃ」

オニオンは、頭から少し血を出しながら、ズボンを下ろしたままの情けない格好で、まだ倒れている。

「わたしに、任せて」

姫は回復魔法を試してみることにした。

「痛い痛い飛んでけ〜！ って何これ」

「にゃにゃ、姫にゃん、自分突っ込みにゃ」

「そう言う問題じゃないでしょ。オニオンが大変なのよ」

「そうにゃ、棺桶にゃら自分でついてくるのにゃ」

「師匠が師匠なら弟子も弟子ね」

「失笑のデジにゃ」

姫は洞窟の天井を見上げ、溜め息交じりに言う。

「ああ、あたしって、なんて不幸なんでしょう。おやじギャグ言う変な猫と、ばっパマンと一緒に旅するなんて」

と、突然、叫び声が上がり、オニオンが飛び起きた。

「ぐぎゃ、ぎゃぎゃああ」

「あら、オニオン、…… さては、私の魔法が効いたのかしら」

「違うにゃ」

「えっ。どうして」

「まやちゃん、引っ張ったにゃ」

「何を引っ張ったの」

ふと見ると、オニオンは股の間を押さえて、ぴょんぴょん飛んでいた。

「元気になって良かったにゃ」

「でも、…… なんか、とっても痛そう」

「爪でにゃ、こうやってにゃ、引っ張ったにゃ。オニオンのスイッチにゃ」

「まやちゃんの前で気絶出来ないね、うふ」

睡眠も取って元気いっぱいのみやちゃんを先頭に、機嫌の悪い姫、全身傷だらけのオニオンの三人は、さらに洞窟を進む。洞窟は、真っ直ぐの一本道であった。

「にゃにゃ～ にゃらにゃにゃ～ん」

「ねこの姉さんは唄が上手ですね」

「そうにゃ。スコップの歌にゃ」

「スコップ？」

「そうにゃ、正解一つだけのクイズにゃ」

「正解ひとつだけのクイズ、…… クイズって元々正解は一つでは」

「オニオン、相手しちゃだめよ。直ぐ調子に乗るから」

ビロビロリー！

”すけべどん” が現れた。

すけべどんとは、スケルトンである。骸骨のモンスターだ。

姫が、すけべどんをジロジロ見て言い始めた。

「いやー、なに、ちょっと恥ずかしくない」

「恥ずかしいにゃ」

「骨よ、骨。やせ過ぎよ」

「ガラガラにゃ。ダシも取れないにゃ」

「そして、名前が、すけべどん、あっはははは。すけべ、すけべ」

「にゃはははは。にゃはははは」

姫とみやちゃんは大喜び。お腹を抱えて笑っている。オニオンは二人のテンションについていけない。そして、すけべどんは、……。

「どうして、どうしていつもこうなんだ。俺だって、好きで、すけべどんじゃないさ。俺のどこが、すけべなんだよ。くそ、こうなったら」

と、仲間を呼びに行った。

「にゃはははは。すべん、べん」

「あれ、もう居ないよ」

「ほんとにゃ。すべん、べん、いないにゃ」

と、すけべどんが二人になった。

「あっはははは。すけべが増えた」

最初のすけべどんが言う。

「この方をどなたと心得る。すけべどん・チャンピオン様だぞ」

みやちゃんと姫が大爆笑する。

「にゃはははは。ちんぴょん、ちんぴょん」

「すけ、すけ、すけべのチャンピオンだって、く、く、腹痛い」

出て来て名前を言っただけで笑われる、あまりのことに、すけべどんらは、イジケて、すごすご去っていった。

「にゃにゃ。また来ないかな、ちんぴょん」

オニオンは、この二人と一緒に旅して大丈夫なのかの疑問が湧くのであった。それで、まだ笑いこけている二人を残し、一人でとぼとぼ歩いていた。

ビロビロリー！

”スコップぴょん” が現れた。

スコップぴょんとは、スコップのモンスターである。古いトンネルなどに忘れ去られたスコップに、怨念が宿った物と言われている。ぴょんぴょん跳ねてくる。

「な、なんだ、どうして」

オニオンは、その時、一人だけで歩いていたことに気づいた。

「わ、わ、どうしよう」

スコップぴょんが大きく跳ねた。

バシ〜ン！

「のどちんこプツン、じゃないけどー」

オニオンは強烈に殴られ、気絶した。スコップぴょんは去って行った。しばらくして、笑いの収まった二人が、オニオンの倒れているところまで来た。

「あら、また気絶している」

「気絶にゃ」

姫はちょっと可哀相と思ったが、言った。

「まやちゃん。あたし、後ろ向いているから、またオニオンのスイッチ入れてあげてね」

「ほいにゃ」

姫は後ろを向く。ちょっとしてから、叫び声が響く。

「ぐぎゃ、ぎゃぎゃああ」

「元気に、にゃったにゃ」

「よかったね、うふ」

三人は出口に着いていた。

「あら、随分と短くない。なんか変よ。こんな距離じゃ、山を通り抜けられないはずよ」

「これにゃ」

洞窟の出口に立て札があった。

”ショートカットのトンネル”

「便利な立て札にゃ」

「そう言う問題じゃないでしょ。でも、まっいいか」

ええっ、納得するなよ。この二人と一緒にだと自分がダメになる。オニオンの悩みは深まっているのであった。

[ここまでをセーブしますか？ ー ー はい]

森：森のマンモーにゃ

洞窟の出口の辺りは森だった。木に囲まれているようで、方角も自分のいる場所もすぐに分からなくなりそうだった。似たような風景の連続なのだ。

「分かりずらいところね」

さすがの姫も少し心細くなってきた。オニオンがポツリと言う。

「この森は、まだ来てはいけなかった場所なのでは、……」

「どういうことさ、オニオン」

「えっ、だから、本来は、道に沿って旅をして、レベルも上がって来るところで、そんなパーティが、城に戻る近道がああのトンネルで」

「裏技ってこと」

「裏技と言うよりも、もしそうなら、レベル低いのに逆に来ると、ただの自滅、パーティ全滅ってことに」

「ふーん」

まやちゃんのご機嫌な笑い声が響く。

「にゃはははは、にゃはははは」

ちょうちょを追いかけていた。

「ちょっと、まやちゃん待ちなさいってば」

姫とオニオンはまやちゃんを追いかける。二人が追いついた時、大地が、どしんどしん、と揺れる。巨大なゾウ、マンモスに出会った。

オニオンが思わず叫んでしまった。

「ぎょぎょ、マンモスだ！ やっぱりそうだ。まだ来ちゃいけなかったんだ。こんなデカイのに勝てるわけないよ！ 死ぬ、死ぬ。全滅、全滅だあ」

オニオンの叫び声に消されて、モンスターの名前と解説が良く聞こえなかった。

「文句言っていないで、さっさと攻撃しなよさ」

「ええっ。また、僕ですか」

「仕方ないでしょ、あんたが叫んでる間にあたいらは、もう攻撃したんだから」

「だかにゃ」

姫のムチとまやちゃんのパンチを食らっても、マンモスはぴんぴんしている。

「ぎょえっ。ぴんぴんしてるじゃないですか」

「そうよ、皮が厚くて、ダメージ受けないみたいな、感じ」

「ほにゃ」

と、まやちゃんは手を見せる。爪にマンモスの毛が数本付いている。

「それが、まやちゃんが与えたダメージよ」

「全部抜くのは、大変にゃ」

オニオンは恐怖で動けなくなった。

「にゃにゃ、オニオン、固まってるにゃ。キャンセルにゃ」

「まやちゃん、それちがう」

マンモスは、余裕で、後ろを向くと、お尻を、ふりふり、挑発した。

「パオー（お前ら、最低）」

また、姫とまやちゃんが攻撃する。やっぱり効かない。その時、オニオンは、挑発にかかって、切れた。

「ざけんじゃねえ。

魔法の粉！」

塩かけてどうするの、姫は思った。

「また魔法の粉かよ。他の攻撃しろよ」

「そうにや。激水流にや」

「もっとだめじゃん」

オニオンは、姫とまやちゃんの声も聞こえない程、頭に血が上っていた。ザックをごそごそして“こな”を取り出し、すたすた歩いて行って、まだ挑発を続けているマンモスのお尻に、粉をパラパラかけた。

「パ、パッパオー」

奇跡が起きたのか、マンモスは凄い勢いで走り去った。

ジャカジャンジャ〜ン！

“切れ痔・マンモー” は、逃げた。

「ちょっとオニオン、何かけたのさ」

「これさ」

と、手を広げて見せる。その粉は、一味唐辛子だった。

「にやるほど」

「切れ痔にかけてやったさ」

「あんた意外と残酷で困ったやつね」

「困ったにや」

ジャカジャカジャ〜ン♪調子はずれのバンジョーの音が響く。

「困ったときは〜♪ 僕らを呼んでね〜♪」

“切れ痔・マンモー”だねー、元々はクレイジー・マンモ〜♪。マンモー！ はぐれマンモスだ〜よ♪」

マンモーに出会って、ますます、疑惑を深めているオニオンは、ビクビクしながら歩く。姫も、なんか、やばいかもと思出した。

「ジに～は、マンモ～、にゃ～にやら～にゃ」

ジに～は、マンモ～、にゃ～にやら～にゃ」

「変な歌作るな」

まやちゃんは上機嫌であった。そんな、まやちゃんが、どんどん進むので、姫とオニオンも仕方なく付いて行く。

「まやちゃん、どこ向かっているか分かってる」

「あっちにゃ」

オニオンも聞く。

「あっちに何が有るんですか」

「それをにゃ、調べるにゃ」

また、まやちゃんが、まともなことを言っている。オニオンは考え考え言う。

「ひょっとすると、ラベルが上がって、光の戦士に目覚めたのかも」

姫はイライラしてきた。

「オニオン、違うよ」

「えっ、違いますか」

オニオンは上目づかいに聞き返す。

「なま、言うなら、ちゃんと言いなよさ。ラベルじゃなくてレベル」

「ぎょぎょ、違うってそっちが違うってこと」

「そっちもこっちもないの。違うの。それに」

「それに」

「まやちゃんも私も、レベル二だし」

「姉御たちって、レベル二、……」

「トンネルに入る前に上がったじゃん」

「……」

オニオンは、言葉が出なかった。オニオンのレベルは十だった。

「にゃはははは、にゃはははは」

まやちゃんが笑い出した。

「やばいよ。行くよオニオン」

「そんなこと言っても、…… やばいって何が」

「まやちゃんが、ちょうちょ見つけたんだよさ。急いで捕まえないと走って行っちゃうよ」

二人がまやちゃんに追いつく。

「ちょうちょはだめだって」

「にゃ」

ビロビロリー！

“去るベル・タイガー” が現れた。

去るベル・タイガーとは、サーベルの様な牙を持つ虎であった。普通の虎よりも大きく、力がある。爪も、まやちゃんの何倍も大きかった。

「ガルルル」

去るベル・タイガーが唸る。

「もうだめだ、あんなのに勝てないっす。これで最期っす」

「オニオン、一々うるさいんだよ。見てな。セカンドスパーク」

去るベル・タイガーには、姫の電撃のムチのほど良い刺激が気持ち良かった。目を細める。

「気持ち良くしてどうすんすか。ラベルニだし、ラベルが違いすぎるっす」

「だから、レベルだってば」

オニオンは、あたふたして、ズボンを下げるのが間に合わない。

「どうしたのさ」

もじもじ、しながら答える。

「ちびっちゃった」

しかし、まやちゃんは、相変わらず上機嫌。

「にやはははは。にやはははは。おとうにゃん、おとうにゃん」

と言いながら、去るベル・タイガーに近寄って行く。

「ちょっと、まやちゃん。そいつは、おとうさんじゃないよ」

「ねこの姉さん、あぶない」

しかし、まやちゃんは大喜び。

「おとうにゃん。にやはははは。遊んでくれにゃ」

すると、去るベル・タイガーとまやちゃんは追いかけてっこを始めた。

「遊んでんじゃん」

まやちゃんは大喜び。

「にやはははは。にやはははは。まで、まで」

しかも、まやちゃんが飛びつこうとすると、去るベル・タイガーが逃げるのだ。

「にやはははは。にやはははは」

まやちゃんは捕まえようと追いかけるが、去るベル・タイガーの方が動きが早く捕まらない。それを、繰返している。そのうち、去るベル・タイガーが思いっきり走って行ってしまった。さすがの、まやちゃんも追いかけるのを諦めた。

ご機嫌なまやちゃんが戻ってきた。

「面白かったにゃ」

姫が小首を傾げる。

「でも、どうして、逃げちゃったの」

オニオンは気づいた。まやちゃんの首輪の鈴が、ベルに変わっている。去るベル・タイガー、……ベルの音で逃げたのか。でも、そんなんでいいのか。大丈夫なのか。それに、どうやってベルに変わったんだ。

「まっいいか。みんな無事だしさ」

「ええっ。いいんですか、姉御」

「じゃあ、あんた倒せるの」

「そうにゃ」

「でも、でも、首輪が、首輪が」

「はっきり言いなさいよさ」

「にゃよにゃ」

首輪を指差し言う。

「ベルになってるんですけど」

姫もまやちゃんの首輪のベルに気づく。

「あら本当。ベルにもなるんだ。いい首輪ね、まやちゃん」

「にゃはははは。ベルにゃ」

まやちゃんが、ベルを弾くと、リンリンと音がする。

オニオンは、そんな二人の反応に、ショックを受けた。そして、人生とは何かを、少し学んだ気がしたのであった。

まやちゃんリーダーにゃ

ちょうちょもいるし、睡眠十分、おもいっきり遊んで、まやちゃんは絶好調。どんどん元気良く森を進む。今度は足元を見る。新たな遊び相手を見つけた。

「コウロギにゃ。バツタにゃ」

まやちゃんは、元気いっぱいなのに、オニオンはなぜか気分が沈んでいくのだった。キャロット姫に言う。

「姫の姉御。やっぱり戻った方が、……。今のところ、たまたま上手く行ってますが、このまま進むと、モンスターが強すぎて帰れなくなるような」

姫もなんとなくオニオンに賛成なのだが。

「じゃあ、そんなに心配なら、オニオンがまやちゃんに言いなよさ」

「えっ、どうして、まやちゃんに」

「だって、リーダーは、まやちゃんよ」

オニオンはびっくり、石につまづく、ベタっところんで泣き出す。

「えーん、えーん。痛いよう、痛いよう」

「はい、はい。ちゃんと自分で歩くのよ」

と、姫はオニオンを助け起こし、ふと思い出す。

「痛い痛いの飛んでけ～」

と、回復呪文を唱える。オニオンは泣き止んだ。

「あら、呪文が効いた」

オニオンは、まだ半べその顔で、言う。

「どうして、リーダーは、まやちゃんなんですか。姫の姉御が、リーダーだと、思ってた」

姫は即座に答える。

「わたしは、リーダーやれるほど無頓着な性格じゃないの」

「むとんちゃくって」

「細かい事に、とらわれないうてこと」

オニオンには良く分からない。

「無頓着ならリーダーになるんですか」

「あら、違うよ。判断力があって、行動する時は無頓着ってこと。それが、リーダーの判断力ってことね。あたしは、もっと繊細だからさ、その無頓着がないのよ」

姫の姉御が繊細、……。どこが繊細なのか聞きたくなかったが、それは、グット抑える。

「まやちゃんは、まやちゃんには、リーダーの判断力が有るんですか」

「あるじゃん。西に向かったのも、変な洞窟に入ったのも、マンモーに遇ってもタイガーに遇っても進んでるのも、全部まやちゃんが決めたじゃん」

そういえば、……。オニオンにもボンヤリと分かりかけてきた。

「例えばね、そうね、オニオンがリーダーで、城から西に向かうと決めたとする。いい。それで、わたしが聞くわけ、この先は山で何も無いよ、戻って北か東の道に行こうよってさ。オニオンはどう答える」

「そうですね。やっぱ、道に沿って行く方が、良いですね」

姫はすっかり、なりきって言う。

「あんたが西に行くって決めたんじゃない。行く先変えるのかよ」

「ええっ。戻った方がって、姫の姉御が言うから」

「じゃあ最初なんで西なんて決めたのさ」

「だからそれは、まやちゃんが、むしの方角だからって」

姫は、ふっと表情を戻す。

「ほらね。オニオンだって、まやちゃんに頼ってるじゃん」

オニオンはギョツとした。

「オニオンだって、知らず知らずの内に、まやちゃんを頼ってるってこと。言葉で理解出来なくてもフィーリングで、心で感じてるのさ」

そうなんだ、と、二人の少し先に行く、まやちゃんに目を向ける。何か食べてる。両手で何かを器用につかんで、それをムシャムシャ食べている。姫もまやちゃんに目を向ける。そんな二人の視線を感じて、まやちゃんは振り向く。

「にゃんにゃ」

どうも手に持っているのはコオロギの様だ。

「コウロギ？」

「そうにゃ、姫にゃんも食べるにゃ」

「ねこの姉御、お、おいしいんですか」

「そうにゃ。まやちゃんお腹いっぱいにゃ」

「っていったい何匹食ったんだよ」

「そうにゃ。いもむし二にゃ、バッタが四にゃ、コオロギが三にゃ」

オニオンが大きな声で答える。

「九だ！」

「オニオンすごいよ。足し算出来たじゃん」

「足し算。何のことですか。二三四はカブ目だから九って、常識ですよ」

「に、さん、し。カブ目。何の話さ」

「またまた、姫の姉御もカマトトぶっちゃって、ちんちろりん、ですよ、ちんちろりん」

まやちゃんの顔がパッと明るくなる。

「ちんちろげ、カップめんにゃ。カップめん、ちんちろげ入ってるにゃ」

「違う、絶対違う」

オニオンは言葉が出ない。

「……」

リーダーって何？ オニオンの疑問は一つ増えた。姫はまだブツブツまやちゃんに何か言ってる。まやちゃんは、新しいコオロギを見つけた。

「にゃにゃ、コオロギ見つけにゃ」

「お前が、その石ずらしたからだろさ」

三匹の巨人にや

「にやにや。急に明るくなったにや」

森の中の草原、周りは木なのにそこだけ草原で、日の光が射し、視界が開けている。野生の花が咲き、秘密のお花畑だった。

「まあ、なんてステキなんでしょう」

キャロット姫の目はキラキラしていた。

「なんか、変な感じがするぞ」

オニオンは足元がほんの少しだけゆれてる気がする。

「姫にゃん」

まやちゃんが、とても真剣な顔で言う。

「どうしたのまやちゃん」

「半分の葉にや」

「半分の葉がどうしたの」

「見たことあるにや」

姫はポツリと答える。

「あたしさ、見たことないさ」

まやちゃんがオニオンを見る。

「な、なんでしょう、リ、リーダー」

「リンダじゃにやあにや、まやちゃんにや」

「いや、ですから」

「それよりにや、オニオン見たことあるにや」

オニオンもキツパリと言う。

「ありません」

すると、まやちゃんは近くに生えている黄色い花の葉を両手でブチっともぎ取り、半分ほど、むしゃむしゃ食べた。残った半分ほどの葉っぱを二人に見せる。

「半分の葉にや」

「違う、絶対違う」

でも、姫もオニオンも大変な問題に気づいたのだった。

「誰も半分の葉を見たことないんじゃない」

「探すも何も、見つける方法がないってことでは」

まやちゃんは、今度はさっきの草の隣の赤い花の葉をもぎ取る。半分ほど食べてから言う。

「これにや」

「だから違うって。それに、いちいち半分食べるな」

「半分の葉にや」

どしん、どしん、どしん。どしん、どしん、どしん。大地が揺れる足音が近づく。

ビロビロリー！

“サイの目クルクル” が三匹現れた。

サイの目クルクルとは、サイクロプスにそっくりの一つ目の巨人である。身長が四メートルから五メートルもある。筋肉だらけの体に原始人のような変な虎のパンツをはいて、手には、これまた巨大な棍棒を持っている。サイクロプスとの違いは目玉がサイコロで、常にクルクル回っていることだ。

サイの目クルクルの一匹が吠える。

「おいらの花をいじめるやつは誰だ〜」

姫が反射的に答える。

「自分の方が思いっきり踏んでるじゃん」

しかし、あまりの大きさ、しかも、三匹。姫はビビってしまった。

「あ、あれ、虎のパンツ。さっきの虎の仲間をパンツにしている」

恐怖で動けないのに、口だけ動く。

「あんな棍棒でなぐられたら、オニオンの気絶だけで済まないよ」

まやちゃんは、サイコロが大好きだった。転がして遊ぶのだ。それが、目の前で、三つも（三匹の目玉）回っている。

「にゃはははは。にゃはははは。サイコロ、サイコロ、くるくる」

大喜び状態になった。

「サイコロで遊ぶにゃ」

と、サイコロに触ろうとして、サイの目クルクルの周りを、飛び跳ねだした。

「大変、まやちゃんが、やられちゃうよ。オニオン、なんとかして」

「そ、そんな。姫の姉御どうしたんですか」

「ごめん、あたし、怖くて動けないの」

「ぎよぎよ。まともな状態なのは」

「オニオンだけよ。オニオンだけが頼りなの」

キャロット姫に頼りにされて、オニオンの体に力がみなぎる。

「ようし、こうなったら、…… やつら、まとめて灰にしてやる。

オニオン爆炎！」

「凄いねオニオン。そんなこと出来るんだ。やつらを燃やしちゃうのね」

しかし、炎が上がらない。

「ちょっと、オニオン、どうしたの。全然、燃えてないよ」

オニオンは、ザックをごそごそしていた。

「何してるの」

オニオンは、やっと探し物を見つける。それを、手に持つと、すたすた、サイの目クルクルに近づいていく。

「オニオン、止めなさいってば。踏まれちゃうよ。潰されちゃうよ」

しかし、オニオンは、心も燃えていた。

「僕がやつらを灰にしてやる」

一番のサイの目クルクルの足元で、百円ライターで火を点けた。

ジュ。

サイの目クルクルのすね毛が数本燃える。

「よし」

自分だけ納得すると、次のサイの目クルクルに近づいていく。そして、足元で、火を点ける。

ジュ。

そして、三匹目にも。

ジュ。

オニオンは戻ってきた。

「灰にしてやったぜ」

「すね毛だけじゃん」

オニオンにすね毛を焼かれたサイの目クルクルらは、怒った。ピッと音がして、”怒り状態。攻撃力増加”の看板が現れる。

「大変。もっと強くなったよ」

「俺が、まとめて灰にしてやる」

百円ライターを握り締めポーズを決める。姫は動けない。まやちゃんは、サイコロに夢中だ。サイの目クルクルは、痔でもないし、去るベルでもない。そして、怒りで攻撃力が増加している。

そこは、森の中の草原。誰も知らない草原。パーティ全滅の危機であった。

[戦闘中はセーブ出来ません ー ー 確認]

「なんでセーブできないのさ。全滅したらどうするのさ」

「姫の姉御。その場合はロードするんじゃないかと」

「ロード」

「ちょうど、洞窟出たところでセーブしてたから」

「ふーんって、洞窟出たからの苦労はどうなるんのよさ」

「.....、消えちゃう、かと」

姫はちょっとだけ考える。

「消えちゃう、..... まっいいか」

「消しちゃだめにゃ。頑張るにゃ」

「お前が頑張れよ。サイコロに喜んでないでさ」

「にゃにゃ。サイコロにゃ。にゃはははは、にゃはははは」

「どうしよう、困ったわね」

ジャカジャカジャーン♪調子はずれのバンジョーの音が響く。

「困ったときは〜♪ 僕らを呼んでね〜♪」

僕ら、おたすけ三銃士〜♪

りんご！

なし！

みかん！

う～ん、ジューシー♪

僕らが居れば～ 安心だ～ 戦闘も～ 一時停止～♪」

まやちゃんはサイコロに夢中だった。しかし、もっと楽しいことが起きた。

「おら、おら、おら」

どしん。どしん。

「おら、おら」

ばたん。ばあたん。

「おらもおら」

どっちらけ。

…… サイの目クルクルの攻撃が始まったのだ。

ドギャン・ドガン・ドブグワ・ベコグ・ドベシャ

棍棒が大木をなぎ倒す。地面を凹ます。五メートルの身長に、振り上げた腕を合わせると七メートル。持ち上げた棍棒の先は十メートル以上であった。それを振り回すのだ。

「にやはは、にやはは」

花の陰に隠れる。お尻が、尻尾が見えている。

まやちゃんは、ボブテイル。ウサギみたいな短いふさふさの尻尾だ。その尻尾を忙しく左右に振る。尻尾だけでなく、お尻も振り振り。可愛い仕草だが、瞳は大きく丸く開かれ、体中の筋肉が、張り詰めている。戦闘準備完了なのだ。

棍棒が唸る。しかし、戦闘準備完了のまやちゃんには、止まって見えるのだ。笑いながら避ける。棍棒が来る。避ける。棍棒。飛ぶ、棍棒の先に載ってる。ものすごい勢いで棍棒が振り上げられる。その勢いに負けてか、利用してか。

「ふにゃ、にゃにゃにゃああ」

まやちゃんが、空高く飛んだ。

オニオンはさっきまでの威勢もどこへやら呆けたように、そんなまやちゃんの様子を見ている

。

「す、すご過ぎる……」

やっと恐怖から立ち直った姫が、思いっきりオニオンの腕をつかむ。

「わ、わっ。なんだ、姫の姉御じゃないですか」

「なんだじゃないよ。ぼっけっとしてないで、今の内に逃げるのよ」

「で、でも」

「じゃあんたが、まやちゃんの代わりをするの」

オニオンは直ぐに答えた。

「逃げます」

二人は逃げた。棍棒の音。クルクルの唸り声。それと、

「にやははは、にやははは」

まやちゃんの笑い声。やっと聞こえないところまで逃げた。

キャロット姫は木にもたれて一休み。ふとオニオンに目を向けた。

「オニオン泣いてるの」

オニオンはしゃくり上げながら答える。

「だって、まやちゃんが」

「まやちゃんがどうしたって」

「死んじゃう」

さすがに、死んだとは言えなかった。

「大丈夫よ」

「えっ。でも、でも。僕、僕逃げちゃったし。あんなのに、一回殴られたら……」

姫は少しイライラしてきた。

「だから、大丈夫だって言ってるでしょ」

「でも、でも」

「あたしの言うことが信用できないの」

オニオンはうな垂れた。姫の姉御もきっと空威張りしてるんだ。そう思った。

キャロット姫は辺りを見回している。

「あそこに行くよ」

それは、小高い丘だった。そこだけ、木も草もなく、その丘の上まで登れば、辺りの状況を調べることが出来そうだった。でも、ちょっと歩く。

「なぜ、あの丘に」

「あそこから見たら、道や町やこの森の終わりが分かるかも知れないでしょ。だめでも、山が見えれば城に戻れるかも知れないし」

そうか、行くしか無いんだ。オニオンはいつに無く真剣な顔をした。キャロット姫がオニオンの顔を見つめている。そして言った。

「あんたさ、まやちゃんのこと、あたしが理由もなく大丈夫だって言ってるって思ってるでしょ」

「り、理由。理由って」

「やられたら棺桶になるでしょ」

「うん」

「棺桶になったら」

「そうか。後ろから、ちょろちょろついてくる」

姫は後ろを指差す。

「無いでしょ。だから大丈夫なの」

「あはははは。そうだったんだ」

歩き出した。そして、オニオンは気が付いた。姫の悲しそうな顔。そうか、そうなんだ。いつかは、後ろに棺桶がついて来るんだ。

「さようなら、元気なまやちゃん」

それは誰のつぶやきか、心の声か。二人は黙ったまま丘に向かうのであった。

必殺技すごい？

丘に近づく。いつもなら、姫が何かぶつぶつ文句を言ってるはずだ。いつもなら、オニオンが何か変だと感じるはずだ。いつもなら、まやちゃんが……、オニオンは何か聞こえた気がする。

「えっ。猫の姉御」

「何言ってるの、そんな訳ないじゃん」

と、今度は、はっきりと聞こえた。

「にやはははは、にやはははは。ちょうちょ、ちょうちょ」

二人は同時に振り返った。

「まやちゃん」

ちょうちょを追いかけるのを止めて、まやちゃんは二人に追いつく。

「上手くいったにゃ」

「どういうこと」

「足遅いにゃ」

オニオンにも全てが分かった。作戦だったのだ。まやちゃんがオトリとなってサイの目クルクルの注意を引き付ける。姫とオニオンが逃げる。少ししてから足の速いまやちゃんが逃げる。

「そうかあ、全部、全部作戦だったんですね。すごい、まやちゃんさんすごいです」

まやちゃんは大きく胸を張る。

「まやちゃんすごいのにゃ」

「ほんと、今回はまやちゃん大活躍ね」

まやちゃんは、さらに胸を反らせる。

「まやちゃん大活躍にゃ」

すると、まやちゃんは、くるりと振り返り、サイの目クルクルの居た所に戻ろうとする。

「ちょっと、まやちゃん。どこ行くの」

「にゃ」

「やっと逃げたばかりですよ」

まやちゃんは小首を傾げて何言ってんの顔で答える。

「まやちゃん戻るにゃ。葉っぱを取るにゃ。クルクル来るにゃ。そしてにゃ」

「そして何よ」

「まやちゃん、すごい、大活躍にゃ。もう一回にゃ、すごい、大活躍するにゃ」

「しなくていい。ぼけ」

まやちゃんは姫にどつかれた。オニオンは気付いた。サイの目クルクルより姫の姉御の方が強いかも。だって、あの猫の姉御が逃げられない鋭い突っ込み。

「あの丘に行くの」

「にやるほど、おかんにゃ。お母さんのことにゃ」

「丘よ、おかんじゃないの」

「にやるほど、おばんにゃ。姫にゃんのにゃ」

「誰がおばんじゃ。どつくぞ、われ」

「にやるほど、おかめにゃ。これかね、あれかね、こりゃおおかめん。とっても固いのにゃ」

「そんな石食うんじゃねえ」

丘の近くまで来た。

ビロビロリー！

”ドク・キノコ” が現れた。

「俺様は、ドク・キノコだ」

まやちゃんとオニオンはきょろきょろした。

「どこにゃ」

「どこにいるドク・キノコ」

キャロット姫には分かった。

「お前か」

「そうだ、よく気付いたな」

「そんなデカイの気付かない訳ないじゃん」

小高い丘、そう見えていたのは、実はドク・キノコだったのだ。

「気付かず俺に登る。そして俺の必殺技でやられるのだ。それが、お前らの運命だ」

「だから、気付いているってば。それに、必殺技ってまさか毒じゃないでしょうね」

ドク・キノコは驚いた。

「なぜ、なぜ俺の必殺技が分かった。お前は占い師か」

その時、まやちゃんは、ひらめいた。

「そうにゃ。必殺にゃ」

「どうしたの、まやちゃん」

「まやちゃん技が増えたにゃ」

どうやら、さっきのクルクルとの戦いでレベルが上がったらしい。

「それじゃ、やっつけちゃえ」

「ほいにゃ」

まやちゃんは身構える。そして、叫んだ。

「どこでも、ガブリ」

何でもかじれてしまう、恐るべき必殺技だ。オニオンは、何か変な感じがしている。そして、姫の袖をピクピク引いていた。でも、どんな技か、ワクワク思っている姫は無視する。まやちゃんが飛び掛った。

「あむ、あむ、あむ」

丘の様に大きなドク・キノコのほんの少しを、まやちゃんが噛み切った。

「すごいよ、まやちゃん」

しかし、ドク・キノコは落ち着いている。

「そんなことでは、俺様を倒せないぞ。そんな傷ぐらい直ぐに治る」

「まやちゃん、今度は急所よ、やつの急所をガブリよ」

オニオンは何か言いたそうに、もじもじしている。まやちゃんは、噛み切ったドク・キノコの

一部を、もぐもぐ、食べてしまった。

「あ、あのう」

「だから何だよさ。さっきからもじもじと」

「あいつ、動けないのじゃないかと」

「えっ。逃げれば良いだけ」

「それに、ドク・キノコは食べちゃだめかと」

「当たり前じゃん」

「だって、まやちゃんが」

と、オニオンの指差す先で、まやちゃんは毒にやられてピクピクしていた。

「ああっ。大変よ。まやちゃんが」

それで、ピクピクしているまやちゃんをオニオンがおんぶして逃げたのだった。

病院？ どこにや

ドク・キノコから少し離れた。まやちゃんは毒にやられて、白い顔が青ざめている。まぶたは、うっすらと腫れぼったい。

「く、苦しいにや」

「何でも食べるからでしょ」

「まやちゃん、何でも食べるにや。いい子にや」

「そう云う問題じゃないでしょ」

「残しちゃ、だ、だ、め、にや……」

まやちゃんはぐったりとした。

「ちょっと、まやちゃん。しっかりしなさい」

オニオンは思い切って聞いてみた。

「あの、姫の姉御」

「なにさ、今大変なのよ」

「だから、姫の姉御は、毒消しの魔法は」

「出来る訳ないじゃん。あたしが出来るのは…… そっか」

毒は消せなくても、体力回復すれば、少しはもつ。

「痛い痛いの飛んでけ～」

まやちゃんは、少し持ち直した。

「でも、これじゃあまり持たないよ。どこかに病院ないの。ちょっと、オニオン。誰かに聞いてきて」

「そ、そんなこと言ったって。この森に人なんて居ないっすよ」

「じゃあ、どうするのよ」

その時、まやちゃんがボツリと言った。

「ドク・キノコに聞くにや」

「ええっ。そんなの無理っすよ。モンスターに聞くなんて」

姫が立ち上がった。

「分かったわ。あたしが、ドク・キノコに聞いてくるよ」

「そんな無茶な。あんな、見るからにひねくれたやつが、教えてくれる訳ないっすよ」

姫はウインクして、とんと、胸を叩く。

「大丈夫よ。わたしにまかせななさい」

なぜか姫は自信有り気であった。ドク・キノコに近づく。手を腰に当て見上げた。

「むむ、またお前か。お前も俺様の毒を食らいにきたか」

「お前って言うな」

ドク・キノコは少しひるんだ。

「だから何だ」

「病院を教えろ」

ドク・キノコはびっくりした。

「だ、だから、何だ」

姫は、適当に方向を示す。

「病院はこっちか」

ドク・キノコは答えない。

「じゃあ、こっちだな」

姫は別の方向を示す。

「違う、そっちじゃない。そっちには石の家があるだけで、病院なんてないぞ。薬はあると思うけど、絶対病院じゃない」

「ああなんてイジワルな。お前の母さん出べそ！」

「なんと、なぜそのことを知っている。お前は占い師か」

「お前って言うな」

会話になっていない…… 姫の横にオニオンが来ていた。オニオンは姫の袖をピクピク引く。

「何さオニオン。今大事なとこななのよ」

オニオンはもじもじしている。

「言いたいことが有るなら、さっさと言いな」

「つまり、石の家に行けば、と、思いまして」

「どうしてさ」

「だから、つまり、く、く」

「いいから、まやちゃん連れて来なさい。石の家に行くよ」

「やっぱり、そうですね」

「そうよ、家なんだから誰か居るでしょ。その人に聞くのよ」

オニオンは何か違うと思った。だって、薬が有るって言ってたし。

その時、姫は、ふとひらめいた。

「そうだ。ドク・キノコ！ もし病院の場所を教えたら、十ドンやるよ。十ドンで教えなよ」

「ねえちゃん、十ドンじゃあ、教えられないな」

「じゃあ、幾ら欲しいのさ」

「百ドン」

「だめ、二十ドン」

「百ドンだ。一ドンもまけないぞ」

「オニオンどうしよう」

「しょがないと思いますが」

姫は百ドンを地面に置いた。

「さあ教えなさい」

「ふふふ。良く聞けよ。この森には、病院は無い」

ドク・キノコは少し勝ち誇ってる様に見えた。そこに、ふらふらしながら、まやちゃんが歩いて来た。

「にゃにゃ。こんにゃ所に百ドンが。まやちゃん拾うにゃ」

「おい、こら、それは、俺のだ」

まやちゃんは毒でふらふらして聞いていない。ドク・キノコは動けないし、腕も手も無いので、どうすることも出来ない。

怒り狂うドク・キノコを後にして、三人は石の家に向かうのであった。

木々が疎らとなり、苔むした地面がごつごつとした荒地へと変わってきた。太陽の光を直接浴びる。湿った空気が乾いてきて、からっとした匂いに変わった。

「ああ。やっと、うざい森を抜けたよ」

「むけたにゃよ」

「抜けたよ、又、ケ、タ。むけて無いの。そんなに元気なら自分で歩かせるよ」

「にゃにゃ。まだ、むけてないのにゃ」

オニオンが慌てる。

「ど、どうしてそれを」

姫はびっくりした。

「えー、オニオン四十歳でしょ」

と、オニオンはハーフエルフだから四十歳でも、人間なら十歳ぐらいなのを思い出した。

「そうか、そうなんだ」

「納得しないで下さいよ。そんなことより」

「ずるむけにゃ、赤ピンゴにゃ」

まやちゃんは、しつこい。オニオンは無視する。

「荒地も、森と同じぐらい、うざいかと……」

「なま言うな」

「むきむきマンにゃ」

「だから、まやちゃんは、しつこいのってって、今度は何よ」

まやちゃんの視線の先には、筋肉もりもり(?)の大きな赤いサソリがいた。牛ぐらいの大きさで、尻尾の先には、姫の腕ぐらいの毒針が付いている。その尻尾を大きくそらせ、左右のハサミを広げて、三人を威嚇していた。

「ぎよぎよ。あんなハサミにやられたら」

「首ちょんばにゃ。オニオンがポンとにゃ」

「ええっ。ぼ、僕がやられるんですか」

「そうにゃ。まやちゃん、毒にゃ。姫にゃん逃げるにゃ。オニオンはポンとにゃ」

赤いサソリがハサミをカシャカシャした。

「おぬしら、この辺で見かけぬな。さては、迷い人か」

姫が反射的に叫ぶ。

「サソリが喋った」

「失礼な小娘じゃな。わしは、ドク・サソリなるぞ」

「ぎよぎよ、毒にやられるのは、猫の姉御だけにして下さいよ」

「私たちは、キノコの毒を消してくれる病院を探してるだけよ。この上、サソリの毒までやられたら……」

ドク・サソリが腕を組んだように見えた。

「おぬしら何か勘違いしてないかの。わしのドクは、ドクはドクでもドクターのドクじゃ」

「にやにや。驚、ドク、ドク、トラクター、ドクって何にや」

「話しをややっこしくするな。それに、トラクターじゃなくて、ドクターって、お医者さんのことよ」

「にやにや。お石屋さんにや。まやちゃん、まだお墓は嫌にや」

「お医者さん。治す人よ」

「お岩さんにや。一枚、二枚、一枚足りない。直せないのにや」

「だから、医者だってば。それに皿が足りないのは、お岩さんじゃないでしょ」

「井戸から出て来るにや」

「だから違うって」

そんな二人を無視して、オニオンとドク・サソリは話しをしていた。

「ほほう。おぬしは、プ・リン、なんたらかたら、クソーの弟子であったか」

「お師匠様をご存知なんですか」

「魔法大学時代の後輩じゃな、あいつは」

「ええっ。お師匠様の先輩様」

「先輩様と云うほど者でもないがの」

オニオンは、事情を話す。

「では、わしの家に来なさい。治してあげよう」

オニオンはふと思った。

「魔法は」

ドク・サソリは言った。

「わたしには魔法の才能が無くての。それで、薬を調合する医者となったのじゃ」

それで、三人はドク・サソリの家に行った。そこは、石で作られた家であった。表札が出ている。

”医師の石の家”

姫は、うんざりね、と思った。この世界はこんなキャラばかりなのかしら。三人はドク・サソリに続いて家の中へと入って行った。

どうするにゃ

石の家の中は、ドク・サソリの他に三人が入ってもまだ余裕があった。部屋の片隅に暖炉兼炊事場の暖炉があって、部屋の壁一面は棚であった。棚の上には、古びたビンが、埃を被って並んでいる。

ドク・サソリは、まあ座りなさいと、三人に椅子をすすめる。三人は座った。まやちゃんだけが、ふらふらしている。

「ドク・サソリさん。ドク・サソリさんと呼ばばいいの」

なんとなく、姫は聞いた。

「ふふ。ドクで、どうじゃ。ドクでよいぞ」

そう言いながらドクは、ビンの埃を払いながら、毒消しの薬を探していた。まやちゃんにアダナをつけられなかった幸運な人である。

「じゃあ、ドク」

と、姫はなんとなく話しかける。ドクは左のハサミをさっと振る。

「悪いがの。少し黙っていてくれ。どの薬だったか思い出すから。確か、三種類の薬草の粉末を…… 混ぜる…… 煮詰める……」

姫とオニオンは少し心配になってきた。大丈夫なのか。姫は小声でオニオンに話しかけようとした時、ちらりと、まやちゃんの様子を見た。何かのビンのフタを開けて、中身を食べていた。

「ちょっと、何しているの」

「何でも食べるにゃ」

「食べちゃだめ。薬は有る意味、毒にもなるのよ」

「にゃにゃ。おいしいのにゃ」

姫はまやちゃんからビンを取り上げ、食べている物を口から出そうとする。まやちゃんの口を押さえて、口を開けさせようとするのだ。

ところが、まやちゃんは、いやいやする様に首を振り、口を開けさせない。そして、その間に口の中にあった物を飲み込んでしまった。

そんな二人の様子に、ドクが気が付いた。姫が取り上げたビンをぼんやりと見ている。

「おお、それは、マタタビじゃな。そうそう、ねこには、マタタビじゃ。それを飲むのが良いじゃろう」

姫が慌てる。

「ええっ。これで良いの」

「そうじゃ。どうせ、あのキノコの毒は、そんなに強くないからの。マタタビ飲んで、一眠りでもすれば、元気になるじゃろう」

まやちゃんが、勝ち誇った顔で言う。

「にゃ。それにゃ。くれにゃ」

と、姫からビンを取り返して、ムシャムシャ全部食べてしまった。当然ラリって、ポワポワ状態。ゴロゴロしながら寝てしまった。

「ところで、なんでまた、こんな辺鄙な森に来たのかな」

姫とオニオンは事の次第を説明した。

「ほほう。世界を救うのに大賢者プリンの助けがいる。ところが、そいつは、よぼよぼで、若返らす為、半分の葉を捜している」と

「ところで、ドク先生。半分の葉をご存知で……」

オニオンが聞く。

「もちろん……って、おぬしら、半分の葉がどれかも知らないのか」

「そうなんです」

姫が横から聞く。

「ひょっとして、この棚のどれかのビンに入ってるとか」

「残念じゃがそうではない。わしも若くなりたくての。探して見つけたのじゃ」

「見つけた」

「そうじゃ。しかし、三匹のサイの目クルクルが……」

「サイの目クルクル！」

姫とオニオンが叫んだ。

「おぬしら、あのチンチロリン兄弟を知っているのか」

「チンチロリン兄弟って」

姫が話しを促す。

「一番上が、チン、二番目が、チロ、そして、リン。三人合わせてチンチロリンじゃな」

「な、名前なんですか」

オニオンが聞く。

「そうじゃ。それと、三人の協力・強力技、チンチロリン攻撃にも由来する」

オニオンがひらめく。

「ひょっとして、目玉のサイコロを、一、二、一、で攻撃力二倍とかですか…… でも、それでは……」

「ほほう。おぬし、なかなかするどいのう。普通のチンチロリンとは違うのじゃ。二なら、二倍。三なら、三倍。そろ目は百倍。四五六は二百倍。ピンゾロ千倍じゃ。しかも、スピードもアップする」

「だれが、サイコロの目を決めるの、止めるの」

姫が聞く。

「なに、自分で、自分の目を止めるのじゃ。自由自在じゃな」

背筋がぞっとしてくる。姫はクルクルから逃げたことを話した。

「ほほう。頭にきて我を忘れたのじゃろう。そうでなければ」

「まやちゃんは、チンチロリン攻撃でやられていたってことなの」

「そうじゃな」

今度は、ドクが、半分の葉を説明する。それは、サイの目クルクルの花畑にある草の葉だと云う。クルクルに踏まれても枯れない葉が、半分の葉と言われる年齢を半分にしてくれる葉なんだそうだ。

ドクは、葉は欲しいが命も惜しく、森の近くに住んで十年になると言った。

「十年も。こんなところで。ばかじゃない」

「わしもそう思う。しかし、半分の葉も欲しいのじゃ」

「あ〜あ。せっかく見つけても、ドクにも無理なら、私たちに出来る訳ないじゃん。ねえ、オニオンそう思うでしょ」

オニオンは何か真剣に考え込んでいる。

「ちょっとオニオン。何考えてるの」

「ぼ、僕ら。勝てるかもしれない」

オニオンは話した。

「ううむ。確かに。上手くいくかも知れんの」

ドクがポツリとつぶやいた。その時、まやちゃんが目覚めた。

姫が、オニオンが、ドクが、まやちゃんをじっと見る。三人に見つめられて、まやちゃんは小首を傾げる。姫が思わず言う。

「どうしよう、まやちゃん」

「そうにゃ」

「うん。それで」

「どうしよう、ぎんしょう、どぎゃんしょ」

「何それ」

「なにそれ、これそれ……」

「全部言ったらパクリって言われるよ」

「にゃにゃ。どうしよ、しおこしょう、そうしょう」

「なあんだ。まやちゃんも賛成なのね」

こうして、ドクを新たなメンバーに加え、四人は、オニオンの作戦でサイの目クルクルを退治に行くことにした。

[ここまでをセーブしますか? ー ー はい]

決戦：女神にゃん ふたたびにゃん

ドクの案内で森に入る。何となく道っぽいところを歩く。今までと違って、安心だ。

「それでにゃ。どこ行くにゃ」

「そっか、まやちゃん寝てて聞いてなかったのね」

「そうにゃ」

「クルクルを退治に行くのよ。あの花畑に半分の葉があるの」

「にやるほど。まやちゃん、すごい、大活躍にゃ」

「そうよ、大活躍してね」

なんとなくオニオンは不安になる。

「姫の姉御。ねこの姉御にちゃんと説明しなくて良いのですか」

「ううんと、あんた説明する」

オニオンは理解した。説明出来ない。

四人は池の淵に着いた。どうやらこの池を回って、少し行ったところがクルクルの花畑らしい

。

「にゃにゃ。女神にゃん」

「あら池ね」

まやちゃんは姫を押し。

「ちょっと何してるの」

「お握りにゃ」

「だからだめだってば。それに、お握りよりもっと良いものがあるでしょ」

「にやるほど。姫にゃん金ににやるにゃ」

「あたしは嫌よ」

と、オニオンを見る。まやちゃんはオニオンを押し。

「ぎょぎょ、何するんですか。ああ、どうして」

オニオンは池に落ちた。すると、ぐるぐる渦を巻いて沈んで行った。ドクが首を傾げる。

「この池は、膝ぐらいの深さしかないはずじゃが」

姫とまやちゃんはワクワクしながら待っている。すると、また渦が巻いてバシャッと出てきた

。

「助けてください」

オニオンだった。バシャバシャしている。

「なんで」

「オニオンにゃ」

姫とまやちゃんはがっかりした。ドクが助ける。尾を伸ばした。オニオンはその尾をつかもうとして、毒針を見て手を引っ込める。

「なんじゃ。そんなに余裕があるのなら、自分で上がりなさい」

「ち、違うのです。足、足に何かが噛み付いているのです」

オニオンはバシャバシャしている。

「だから、ちゃんと足で立って見なさい。膝ぐらいの深さのはずじゃ」

それで、オニオンは我に返って、その場に立ち上がった。

「本当だ。こんなに浅かったんだ」

そう言うと、ジャブジャブ歩いて池から出てきた。足に何か噛み付いている。魚みたいだ。

「やだ、魚捕まえたの」

「にゃの」

「ほほう。それはブリじゃな」

「ええっ。どうして、池にブリがいるの。確かに大きな魚だけれど、色も黄色いし」

「にやるほど。ブリキにゃ」

「話しをややっこしくするな」

「やっこをゆでるにゃ、にゃ。ゆでたら湯豆腐にゃ」

オニオンは、ひらめいた。

「じゃあ、この魚を刺身にして、湯豆腐で一杯としますか」

「ちょっと待ちなさい。だから何でって、変なのが増えたよ」

池の中に、赤・青・桃・緑の魚が現れて、池から顔を出していた。

「黄ブリが捕まえた獲物を返してもらおう」

そう赤い魚が言った。

「しゃべる魚にゃ。サーカスに売って、大もうけにゃ」

「そうね、それも良いかもね」

姫の目はキラキラしていた。赤い魚は少し声に怒りを込める。

「何をごちゃごちゃ言ってる。早くよこせ」

「にやるほど。オニオン獲物にゃ。ブリキに捕まったにゃ。返すにゃ」

そう言うと、まやちゃんはオニオンを押しした。

「ええっ。どうして」

オニオンは池に落ちた。

「おお。素直なやつだな。では、黄ブリを返して貰おう」

黄ブリと呼ばれた、黄色い魚は、陸でピクピクしていた。

「生きの良い魚にゃ。これは、刺身にゃ」

魚達は驚く。赤い魚が言う。

「なんて残酷なやつだ」

そして、青い魚が言った。

「合体だ。合体。赤ブリ、リーダー。合体して一気に」

「おお。そうだ。こんな時こそ合体だ。みんな、用意は良いか」

何かヒレをひねってポーズを取っている。

「赤ブリ」

「青ブリ」

「桃ブリ」

「緑ブリ」

陸でピクピクしている黄色い魚の代わりに、赤い魚が言う。

「そして、そこに居るのが、黄ブリ。全部合わせて、ゴブリンじゃ」

「ゴブリンじゃ。って、その為にブリな訳。ねえ、そうなの。ふなだと、ゴフナじゃ、こいなら、ゴコイじゃ。ブリなら、ゴブリンじゃ、なのね」

「まやちゃんにゃ」

「自己紹介するな」

池の中では、合体が始まっていた。とても苦労して、四匹で大きな魚の形になろうとしている。

「なんか、ジグソーパズルみたいね」

「にやるほど。ジにゃ」

「ジじゃないの、ジグソーパズルよ」

「だから、クソーにゃ」

「クソーじゃないの、ジグソーよジグソー」

「にゃにゃ。クソーがジのパンはズルイってにゃんにゃ」

「ばらばらに言うな」

「姫にゃんがクソーって言ったにゃ」

「言ったわよ、ああ言ったさ。さあ、どう、これで満足」

「満足してないにゃ」

「どういうこと」

「あれにゃ」

と、池を指さす。もう少しで、なんとかなりそうなところで、黄ブリがいないので、完了しないのだ。

「リーダーだめよ。合体出来ないわ」

「くそう、よくも姑息な手を使って」

四匹がバラバラとなる。その時、池が渦を巻いた。そして、とても機嫌の悪い女神様が現れた。どさりと、オニオンを投げてよこした。

「いちいち、私を呼ぶんじゃない。お前らもバカやってないで行くよ」

と、言うのと、四匹と、ピクピクしている黄ブリを連れて、池の中に沈みだした。

「そうにゃ。金にゃ」

女神様の顔つきが険しくなる。

「だから、そいつの、上の歯を金に、下の歯を銀にしておいたよ」

それで、沈んでしまった。

「ぼ、僕の歯」

オニオンが口を開ける。

「本当だ。金よ。銀よ」

「パールにゃ」

「何の話やねん」

オニオンが頭を抱える。

「これから一生、こんな歯で生きていくんだ」

「いいじゃん。ステキよ。だって、年取ると歯が抜けるでしょ」

「うん」

「その時、金や銀の歯が抜けるのよ。年金みたいじゃん」

「みたいにゃ」

「おお、おお。いいな、わしも、そんな歯が欲しいの」

四人は先を急いだ。

ドクも仲間にな

森の木々がパーッと開ける。太陽がまぶしい。色々な花が咲き乱れている。

「それじゃ、オニオンこっち来て」

オニオンが姫の横に行く。釣られて、まやちゃんも姫の隣に行く。

「まやちゃんは、来なくて良いの」

「にやにや。帰るのにや」

「帰らない」

「にやるほど。たまごにや。たまごがかえるにや」

「そのかえるじゃないでしょ」

ポッケからカエルをだす。

「これにや」

「ケロケロ」

カエルが鳴いた。

「どうして、そうなるの」

「池で拾ったにや」

「いいから、ちょっと待ってなさい」

姫が電撃のムチの先をオニオンのベルトに結わえる。

「本当に大丈夫かの」

ドクが心配そうに言う。

「クルクルに火を付けて怒らせることが出来るのは、オニオンだけ。でも、二回も同じ事が出来ないだろうって言ったのはドクでしょ」

「でも、その、お嬢ちゃんの細腕で、いくら子供でも、上手く振り回せるかの」

「大丈夫よ、これよ」

と、力の腕輪（スペシャルゴールド）を誇らしげに見せる。

「そのガントレッドがどうかしたんですか」

オニオンが聞く。

「まやちゃん知ってるにや。突っ込みでにや、それにや、痛いのにや」

「違う。これは、防具じゃないの。腕輪、腕輪よ」

ドクが目を細めたように見えた

「力の腕輪（スペシャルゴールド）じゃな」

「そうよ、そして、これを外す」

「ぎゃぎゃ、外してどうするんですか」

オニオンが聞く。

「まやちゃん知ってるにや。それ、売ってにや。復活にや」

「違う。これは、とても重いよ。付けてると筋力アップになるの。そして、これのすごいところは、筋力アップしても、腕が太くならないのよ」

「にやにや、姫にゃん、ムキムキにや」

「違うでしょ。これは元々って、ちっとも太くないでしょ」

まやちゃんは、姫の腕の裏側をつまむ。

「ぷるぷるにゃ」

「つまむな。それに、そんな歳じゃない」

力の腕輪を外した姫の腕は、見違えるほど、強く、動きが早かった。

「なるほどの。でも、それは電撃のムチじゃないのかの」

「そうですよ、ビリビリ・ドッカーンは嫌ですよ」

オニオンが少し不安となる。

「大丈夫だって」

姫は自信ありげであった。

「まやちゃん知ってるにゃ。期間限定にゃ」

姫は大きく頷く。

「そうよ、セカンドスパークスペシャルセットは期間限定で、今まで一度も電撃が起きたことないのよ。そうよね、まやちゃん」

「そうにゃ。お尻ドッカーンにゃ。我慢しすぎにゃ」

「だから、違うってば」

オニオンが驚く。

「ぎょぎょ。違うのですか」

「お前、男だろ。ビビるな」

「お、男も女も関係ないのじゃないかと」

まやちゃんは、ひらめいた。

「にやるほど。お釜にゃ。ご飯炊くにゃ」

ドクは仲間になったのを少し後悔した。姫は力の腕輪をザックに入れる。オニオンはザックから百円ライターを取り出し身構える。

「よし。みんな良い。じゃあドク、半分の葉を取って」

ドクが半分の葉を捜し始める。

「姫にゃん」

「何」

「まやちゃんにゃ、何するにゃ」

「まやちゃんは、クルクルが来たら、目玉のサイコロを一にするのよ」

「にやるほど。つんつんねこパンチにゃ」

「そうよ、それ。つんつんして、一にするの」

オニオンが、もじもじしている。

「あ、あのう」

「言いたいことがあるなら、はっきりいいなよ」

「なよにゃ」

「い、一じゃなくて、たぶん、一、二、一でくるはずだから、一をひとつだけ、三にするんです

。それで、一二三の倍払い、クルクルは、マイナス二百倍の自滅になるはずなんです」

姫はちょっと考えた。でも、アドレナリンいっぱい状態で、すぐ考えるのを止める。そして、言った。

「そう云うことよ。いいから、つんつんパンチよ」

「姫にゃん、つんつんパンツにゃ」

「スカートめくるな。それにパンツって言うな」

オニオンにも見えた。

「あっ、本当だ」

「見るな」

「若いもんはええの。でも、若すぎじゃ。せめて、十五は越えて欲しいの」

いつの間にか、ドクも本当の仲間になっていた。

決戦クルクル兄弟にゃ

半分の葉を捜しながら、ドクは考える。クルクルらはきっと、まやちゃんを見たら今度は倒そうと、チンチロリン攻撃をするはずだ。多分最初は軽く一ニ一で、二倍攻撃だろう。三二三でも良いはずだが、分かりやすくクルクル二匹は一にするだろうから。

出目確定までの僅かな間に、まやちゃんのねこパンチ。一を一個だけ三にする。ここで、また一に戻されるのを防ぐのに、オニオンの出番だ。

すね毛を燃やす。そうすれば、怒りに我を忘れるはずだ。歩いていては間に合わないから、キャロット姫のムチの先にオニオンのベルトを結び、姫に振り回してもらおう……。

「完璧だ。しかし、少し作戦が繊細過ぎる気もするのじゃが」

ドクは独り言を口の中で言った。姫は十二・三、オニオンは十歳位か、まやちゃんは…… 一歳そこそこ……。

「とんだ事になったものじゃ」

笑い声がする。ドクは振り返る。

「にゃははは。にゃははは」

「こら。ちょうちょはだめだって」

ドクはやっと、半分の葉を見つけた。

「有ったぞ。良いか。今取るぞ」

ドクは、二枚をハサミでちょん切った。一枚は大賢者プリンに。もう一枚は自分に。長年の夢、自生している場所が分かって、直ぐ近くに来てからでも十年も経っていた。

大地が揺れる。どこに居たのか。突然の様にクルクル三匹が現れた。

「おいらの花をいじめるやつは誰だ～」

「にゃにゃ。サイコロ、サイコロ」

まやちゃんが飛び出す。クルクル兄弟が気付く。

「お前か。もう、許さないぞ」

「兄じゃ」

「おう、チンチロリン攻撃だ」

「にゃははは、チンチロゲ、にゃ。まやちゃんぺったんこにゃ」

少し離れた所から、思わず姫が突っ込む。

「お前は、メスねこだろ」

チンが自分の目玉（サイコロ）を止める。一だ。

「まず、三倍攻撃だ」

チロが三に、リンが一に。

「まやちゃん、今よ、一にするのよ」

姫はすっかり勘違いしている。

「あっ。だめです。三です」

オニオンは咄嗟のことで、言い間違えた。

「にゃるほど。つんつんパンチ」

まやちゃんは飛んだ。

「だめじゃ、だめじゃ。二にしなければ」

ドクは、クルクルらの足元で、花や草の陰で、出来るだけめだたなく、うずくまっている。怖くて、声が出せない。

「にやははは。つんつん。つんつん」

リンの頭に飛びついた、まやちゃんは、つんつんパンチでサイコロを回した。リンに掴まれるよりも速く、まやちゃんは飛びのく。サイコロの目を見て、姫が叫ぶ。

「二じゃん。どうしよう」

「今じゃ！ やるのじゃ」

ドクは我を忘れて、思わず起き上がり、両手のハサミを振り回しながら、姫に合図する。

「ええっ、でも」

と、姫はオニオンの目を見た。

「姫の姉御やって下さい」

「良いの。ねえ。二で良いの」

オニオンが切れた。

「うおー。早くやれってんだよ」

良く分からないけど、切れたオニオンに、姫が逆切れした。

「どうなっても知らないんだから。セカンドスパーク・スペシャルセット！」

ムチがうなる。すぎまじき力、スピードで、オニオンが振りまわされる。狙い通りに、チンの足元に向かう。

しかし、あまりのスピードで、風が強すぎ、百円ライターに火が付かない。オニオンは必死でライターを擦るが、ちっちゃと音がするだけだ。そして、チンのそばを通り過ぎて、チ口のそばに。

ちっちゃ、だめだ、火が付かない。チ口を通り過ぎる。リンのそばに。ちっちゃ、火が付かない。

クルクルらは、姫とオニオンが何がしたいのか分からない。なにしろ、オニオンが足元をすごいスピードで通り過ぎただけなのだから。そして、気付く。

「リン。目玉。サイコロを一に戻せ」

「了解、兄じゃ」

ああ、戻されてしまう。おしまいじゃ。ドクは一気に体の力が抜け、その場にへたりこんだ。

「オニオン。しっかりしな。セカンドスパークは二回ムチが飛ぶのよ」

オニオンは何か叫ぼうと大きく口を開けた。その時、起きた。

”ピカドン・ビリビリ・ドッカン！”

「にゃにゃ、スペシャルセット炸裂にゃ」

「あら、どうして」

どうやら、期間限定じゃなく、成功率が低いだけらしい。しかし、姫のレベルでは、クルクルに大したダメージにならないはずだ。けれども、ムチの先のオニオンにとっては、すごい電撃だ

。

「うぶぶぐぐ」

オニオンは思いっきり歯を食いしばって耐えた。心の中では、叫んでいた。

「電撃はこないって言っていたのに」

”チンチロリン攻撃確定！ 一二三の倍返し！”

「ええっ。どうして、どうして上手く行ってるの」

リングが、ピクピクと電撃に震えていた。その足には、オニオンが噛み付いていた。オニオンの金と銀の歯は、ムチの勢いもあって、リングの骨まで届いていた。そこに、スペシャルセットの電撃が直接つたわっていたのだ。

クルクルらが吠える。

「ぐおー。体が熱い」

「二百倍」

「自分ダメージだ」

姫がムチを手元に戻す。その間にオニオンは気絶してしまった。クルクルは、自らの二百倍の力のダメージを受け、自滅した。どさり、ぼたり、ずずん、と、三匹とも倒れた。

”モンスターを倒しました……”

ピロピロリーが何回も鳴って、レベルが上がったり、魔法や必殺技が増える。

「やった、やったじゃん。勝った、勝ったよ」

「にゃははは、にゃははは。サイコロ、サイコロ」

まやちゃんはクルクルの目玉、大きなサイコロを取り出している。メノウみたいに綺麗なサイコロだった。

「そんなのどうするの」

「持ってくるにゃ」

「ふふ、サイコロ好きだもね」

「そうにゃ」

「それより、オニオンのスイッチまた入れてあげて」

オニオンはあいかわらず気絶していた。

「ぐぎゃぎゃぎゃあ」

オニオンは気付いた。

「こ、今度からは、もう少し、やさしく起こして下さいよ」

倒れている、クルクルを見る。

「やった、倒れている。やった、勝ったんだ」

「そうよ、オニオンの作戦のおかげよ」

「おかげにゃ」

オニオンは、少し照れた。でも、僕の作戦って全部失敗してたような、と思ったが、黙っていた。そして、キョロキョロする。

「ドク師匠は」

三人は、ドクを探した。

「ドクう。どこ」

「ドクにゃん。どこにゃん」

「師匠う。どこですか」

クルクルの下から、くぐもった声がある。ドクだった。

「ああ、ドク。どうして」

倒れたクルクルの下で、ドクの骨格はひしゃげていた。

「わしは、もうだめじゃ。でも、よかったの」

ポン。ドクは棺桶になってしまった。

「あっ。師匠。こんな、こんなことって」

姫が、オニオンの肩に手を置く。

「大丈夫よ。城に戻れば」

オニオンの顔が明るくなる。

「そ、そうですよね。復活できますよね」

「そうよ」

そして、三人と棺桶一つは、城に帰る道を探すのであった。

オニオンはちょっと聞いてみた。

「あの、ねこの姉御」

「にゃんにゃ」

「どうして、二って分かったんですか」

「そうよ、どうして、二にしたの」

「にゃ。まやちゃん、つんつんねこパンチしたにゃ」

「そうよ、パンチしたでしょ」

「そしてにゃ」

「そして、どうなんですか」

「二になったにゃ」

クルクルの花畑を後にした一行は、また、森に入った。そして……。

「姫にゃん。どっちにゃ」

「オニオンどこへ行く？」

「ぎょぎょ。ぼ、僕に分かる訳ないっすよ」

道に迷った。

「にやるほど。忘れないように、おしっこしとくにゃ」

「今からマーキングしても遅い」

「にゃにゃ。姫にゃん、おしっこ出来るにゃにゃ」

「出来るわよ。そんなことぐらい、って、違うでしょ」

「にゃ、我慢してるにゃ」

まやちゃんは鼻を押さえる。

「やっぱり、くさいにゃ」

「何言ってるの」

オニオンが少し離れる。

「そ、そうだったんですか」

「だから、違うってば」

そこは、丁度、坂になっていた。なぜか、ドクの棺桶がころころ、転がりだした。

「ああっ。ドク師匠が」

「大変。復活出来なくなっちゃうよ」

「かわいそうにゃ」

「そうじゃなくて、何とかしないと」

「にやるほど。にゃんとにゃ」

まやちゃんは、オニオンを突き飛ばした。オニオンは坂を転がる。

「なんで、いつも僕が……」

棺桶と、オニオンは、坂を転がり見えなくなった。

「うん。名案ね。オニオンが拾ってくるのね」

「そうにゃ」

「じゃあ、来るまで待ってましょ」

しばらくして、オニオンだけが戻ってきた。

「ずいぶん遅かったはね。どこかで道草してたでしょ」

「してたにゃ」

「そんな、ひどいっすよ。道草なんて」

オニオンの唇が赤くなっていた。

「オニオンお化粧にゃ」

「あら本当。それって、野いちごでしょ」

「ぎょぎょ。ちょ、ちょっとだけ、ちょっとだけですよ」

姫は手を出す。

「おみあげは」

「持ってないっすよ」

「じゃあそこまで行って、持ってきて」

「で、出来ないっすって、止めてくださいってば……」

まやちゃんは、オニオンを突き飛ばしていた。

「にゃにゃ。オニオン行っちゃったにゃ」

「あんたが、突き飛ばしたんでしょ」

「にやるほど」

「納得してないで、助けに行ったら」

と、まやちゃんを突き飛ばした。

「にゃにゃにゃあ。くるくるにゃあ」

まやちゃんも転がった。一人になった姫は、寂しくなって、歩いて坂を下りて行った。坂の下で、森が終わっていた。

「なんだ、森を抜けたじゃん」

そして、そこでは、オニオンとまやちゃんが、口いっぱい野いちごをほおぼっていた。

「ちょっと、どう言うことかしら」

「にゃにゃ。姫にゃんも転がったにゃ」

突き飛ばしたことを思い出し、姫はちょっと、ばつが悪くなる。

「姫の姉御の分もまだ、いっぱい有りますよ」

「そ、そんなことより」

ちょっと離れたところにある橋を指差す。

「あの橋は何」

「なんか、"渡るに渡れぬ戻り橋"って立て札が立ってますよ」

「渡れないの」

「さあ、戻り橋って書いてますから、戻っちゃうかと」

「そんなの食べてて、調べてないの」

いつの間にか、姫の横にまやちゃんがいる。

「にゃいの」

オニオンは驚く。

「ねこの姉御も一緒に食べてたでしょ……」

「食べてにゃいにゃ」

まやちゃんの手と口のまわりは真っ赤だった。

「あんたも同罪」

「にゃ。橋渡るにゃ」

「一人で行くな」

三人と、いつの間にか棺桶も、橋の前に着いた。なんとなく、まやちゃんを見る。

「にゃら。行くにゃ」

三人と棺桶は”戻り橋”に向かって歩き出した。

パンプキン城に

ふりだしに戻ってしまう不思議な”戻り橋”へ向かって。

[クエスト：半分の葉を探せ ー ー 完]

まやちゃんと光の剣

<http://p.booklog.jp/book/28394>

著者：吉高 雅美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yositakamasami/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/28394>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/28394>